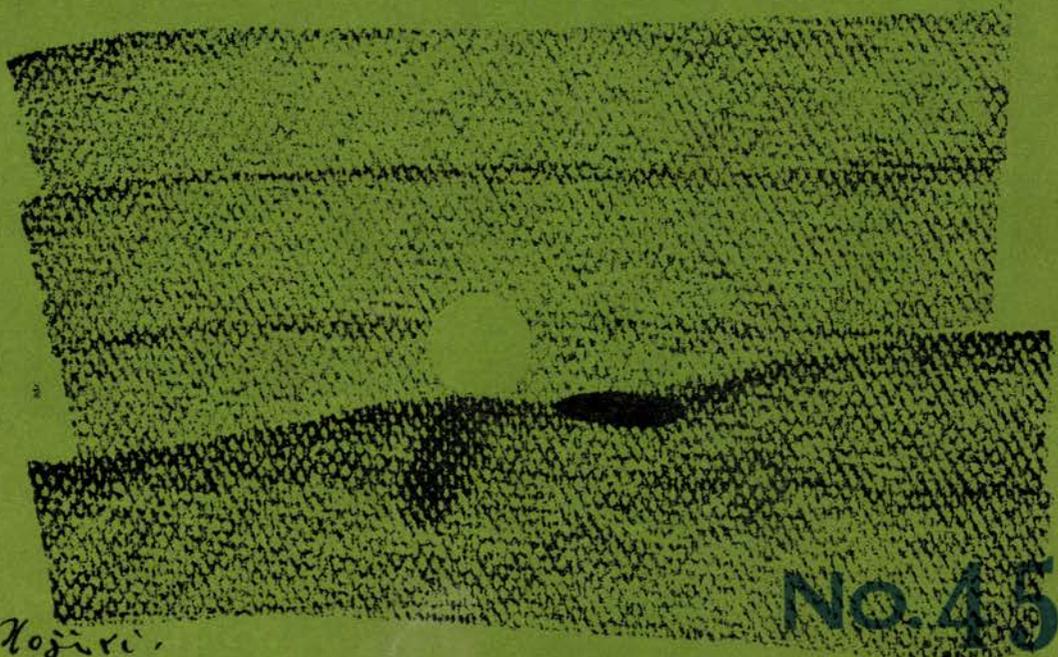


証雅の柳川



麻生路郎☆主宰

四月号



No. 455

THE SENRYU ZASSHI

Kojiri.

川柳雑誌社主催

本社四月句会

5月本社句会予告

切れ味
悪女
けてもの
丘

兼題

何をおいても出席しましょう。
いのちある句はそこから生まれます。

日時 四月七日(水)午後六時

会場 自安寺(〒211)一四七八番
大阪市南区千日前電停スグ北側

兼題「テスト」(三句) 麻生路郎選

「愛着」(三句) 西尾 榮選

「花びら」(三句) 西いわを選

「潮時」(三句) 金井文秋選

席題 三題(当日発表) 若本多久志

柳話

呈賞 ☆各題天位・各題天位から路郎選により不朽洞賞

会費 百五十円

幹事 摩太郎・いさむ・南宗・文秋・庸佑・八郎

与呂志・清人・すすむ・薫風・柳宏子

舟遊

★投句だけの方は郵券五十円同封

(三月七日着便)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪側六〇八一



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (化粧ケース入) 一、八リットル詰・一、三〇〇円

酒 清

日本盛

ニホンサカリ

灘 西宮酒造 醸



不朽洞句帖

麻生路郎



静かに満開 誰れ一人来ず

鬪魚へささやく彼の女の一時

老化がトラベラークロックを購わせた

捨てること何んでもないと思いに

雑草の強さも釜ヶ崎なれば

人造り先ず大学の名から消せ

迷亭を悼む

君も逝きしか春というも名ばかりの寒さ

川柳雑誌★四月号目次

題字：麻生路郎・表紙：野尻弘

不朽洞句帖……………麻生路郎 (3)

大陸放浪 敗亡の旅……………東野大八 (26)

現代柳人録……………丸十府・岡田甫 (40)

川傍柳初編研究(二五)……………川端柳風・高須岨三味・前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄 (10)

飛・燕・往・来……………大八・夢虹 (40)

らんどく帖……………堀口塊人 (14)

土佐のことども……………波辺伊津志 (20)

集 私の作句の焦点……………後藤梅志・布部幸男・湯川銀界・中野懐窓・早川清生・今西章雅・本多柳志 (16)

明治川柳と風俗……………奥津啓一朗 (25)

江戸川柳と紋章……………阿達義雄 (18)

句にメスあてる……………清水白柳 (30)

川柳お座敷小唄……………本多柳志 (35)

川柳太平記……………富士野鞍馬 (28)

大萬川柳大会——十四周年記念を迎えて……………川村好郎 (38)

大萬川柳「誘惑」発表……………川村好郎 (39)

不朽洞の人々……………不二氏の巻 (37)

川柳塔……………麻生路郎選 (4)

同舟近詠……………諸家選 (9)

近作柳檣……………麻生路郎選 (20)

方円帖……………川村好郎選 (20)

金泥集……………北川春葉選 (32)

各地柳壇……………麻生葭乃選 (31)

★柳界展望……………★不朽洞会から……………黒川紫香選 (37)

★一路集「オールドミス」……………田中鳥雀選 (34)

★柳樽室……………傍島静馬選 (46)



川柳塔

麻生路郎選

高槻市 若柳 潮花

読んでからすぐに破れば恋かしら
舞い初めへ仙台平の音を聞き
夕食の膳は仏の灯と向い

兵庫縣 小西 無鬼

ちと鈍い子なのに單車うまく乗り
啜うとも明治の良さを噛みしめる
悟入未だ遠く愚痴る事多く
答弁の不利は小さい声になり

大阪府 西 いわを

スポットを当て、いるのに感じない
ひとの顔バラバラに讚めないで
電話では甘い返事をしてくれる
社長・先生増えて来て煩わし

堺市 八木 摩太郎

調査中と首相みたいな事を云う
ノックせず失礼ネエとキッス中

大阪市 北川 春巢

ヘルメットかぶる職場にいて音痴

入学試験トップにすれば記事になり

銀婚を迎えて(三句)

銀婚のまだ天命が悟れない
すね噛りどもが銀婚祝おてくれ
銀婚に公舎暮しがまだ続き

大阪市 後藤 梅志

愚にかえり命の惜しいままで果て
返事かく封書昨日の日にしとく
猫四五匹家族もなしの老婆住む
よかったと高が私立へほつとなり

ハワイ 羽佐間 柳葉

実力で勝てぬ蔭口強く吐き
教養は積む程凡人らしくなり

堺市 吉田 圭井堂

物価高千円札が薄う見え
世を譲る頃はすっかり子の支配
息詰るシーンへ来ればコマーションル
辻一つ曲がれば焼場と云う住居

防府市 長野 井蛙

如才ない男どっちへでも転び

未練もあって女ヒモから抜け切れず
逆境に育ち善意が汲みとれず

岡山縣 直原 七面山

三号の自信は雪のような肌
ピケから帰えれば鳴っているピアノ
恋持たぬB.G.ガムを噛みつづけ
お世話になっていきます二号悪びれず
ご気嫌が斜めお目見栄詐欺に合い
祝辞代読朗々として読み違え
抱擁へ愛犬心得顔でいる

大阪市 西森 花村

清掃車官僚的に汲んで行き
家計簿へ算盤おこかと子がのぞき
飼犬にほえられている日本髪

鳥取市 河村 日満

ふるさとの山河は雪の初姿
倅せは二男二女とも背が高く
嫁ぐ娘が僕の色紙をくれという

倉敷市 木村 千容

彰翁のたつみすがたの寿老めき
敬霊忌おぎりのように雪少し

彰翁翁米寿



古妻怪我入院

お調子にのるなと神様叱りけり

加賀市 野村 味平

薬にもあきて病を忘れかけ

笑うなら笑えと下座のおてもやん

娘も二十才禿げているのへもう笑い

大阪市 木村 水洞

警官のミスは新聞派手に書き

欠勤をしてまでスキーに行く若さ

新聞はでたらめですと子をかばい

かくし子を許す気になるほどに老い

春来れば手術する気の冬ごもり

葉隠を否定する子と好きな父

米子市 小西 雄々

新築のムードに添わぬ家具を置き

手袋も帽子も脱がぬ女史となり

ネクタイへ合わせる服をまだ持たず

雪どけの町へ手袋落ちたま、

大阪市 山川 阿茶

新幹線数学物理雪に敗け

同じ下手なら踊りの方がましかいな

うぬぼれがテープの小唄で嫌になり

加賀市 那谷 光郎

叙黥沙汰故人は地下で苦笑い

私学診断こんな弱体だったとは

勤務先よく変る娘に仕送られ

金婚の笑はこんな人と添い

法話聞く祖母にイヤホーンいただかれ

大阪市 福井野 迷路

老人が目高の様にクラス会

二兆円で日の丸教えたオリンピック

膝坊主砲列しいてお茶の席

スモッグに河のよごとと人の波

岡山市 浜田 久米雄

年金で暮す自信がまだつかず

修繕をすれば退職金が減り

自家用が来たうれしさは送って出

鳥取市 杉谷 湖山

いたゞきます小さな声でもものたらず

姥桜着の裏を出して見る

機構改革繁瑣な椅子をまたふやし

初姿サワツチャイヤと云うかまえ

京都市 大鶴 喜由

乳房が乳房が意志にそむいてうごめく日

協議の別れ振り向いてなるものか

娘の心盗みに来たは突き出せず

呉市 林野 甦光

往復を稼ぐアイロンに教えられ

神詣でまだまだ女に縁がなく

イヤリング祝福された艶でゆれ

門真市 福島 鉄児

日の丸はないけどここもお正月

おみくじの吉を信じる日の落日

岡山市 服部 十九平

手袋のまゝの握手に恐れ入り

防犯灯点いて空地が野暮になり

大臣を奴が奴がと記者クラブ

高槻市 山田 季賛

朝帰りする職で生き義務宿舍

父ちゃんのへそくり子等の模型へつきこま

日曜日子の数学へ狩り出され

岡山市 田村 藤波

動物に生れた不幸餌をあさり

幸福は太陽が見え空が見え

読書にも倦いて繋いだ犬を解き

残業の夫のおそい雪時雨



誂えむきの雨で一巻読みやぶり

児島市 本田恵二朗

率直に言いますればと向き直り

堺市 高崎雄声

習慣は軽いフトンが頼りなし

十二月金持ちの子になりたがり

年中無休お芽出とうを言うただけ

公明選挙首班選挙は別でしょか

島根県 藤井明朗

横綱の夢もきびしいチャンコ鍋

四畳半ムードを妓肩すかし

台所しばし忘れて美容院

相性はよいがけんかはしています

倉敷市 野田素身郎

出張から帰れば甘えっ子にしとり

へん出して遊ぶわが子が頼もしい

雪も払わず恋人を待つ

神戸市 丸川初甫

税務署の眼には見えない手内職

消えてはつくネオンへあきず人を待ち

母の手が何度かふれた火消つぽ

岡山県 池田古心

貧の中赤で富んだら廻り右

大阪府 早川清生

前掛をしめおり店は子に譲り

社員皆弱卒労働基準法

わが足食う市政に拍手する市民

奈良市 宮口笛生

夫婦誕生春日の社紋として

岡山市 林葵丘

葉参り祖母の歩巾にみな合し

汚れた菜っ葉服に政治をのろう自我

カンナは炎だという女囚は狂い

金魚を殺すざんにん性を子が持ち

神戸市 仲どんたく

新築ヘドクターも人鬼門避け

梁のつや先祖の家に寒く住み

振り向けばもうホステスの影も無し

お迎えをめてたがられる養老院

御先祖の家を幹線切ってくれ

平田市 久家代仕男

不機嫌は株が底値でとも言えず

おもしろく兄弟喧嘩きく夜長

無免許がなんやとアプレ軽く言う

目に痛し白き遺品の片手袋

大阪市 本多柳志

和歌浦八景

値切る気の高苔の青さをかがされる

塩釜はバスの窓から拝まされ

和歌の浦鯨も見えず昏れて行き

海苔舟はもう居らず海の音高く

出雲市 原独仙

不精髭妻が病んでるせいにす

男など嫌いというにルージュ濃く

独占慾か又も隣りで痴話喧嘩

嫁してなほ役立つ腕に職をつけ

岡山市 江国幽谷

字引にはあろとなかろと流行語

停年と云う段落で行をかえ

新潟県 高野不二

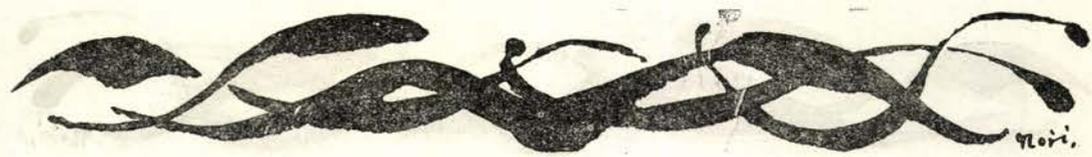
妻に云いたい事をテレビ云うて呉れ

退院に酒の事だけ聞いて来る

ストーブをたけば蠅迄嬉しそう

日当は屋台でなくなるデモ帰り

大阪市 魚住満潮



愛の運動暴力団が主催をし

いつのほどにか質屋の利も覚え

今日は持っている剰銭まで置いて去に

釜ヶ崎と云うだけで採用通知来ず

愛媛県 村上旭 童

商品としてコンドームも並び

パチンコ如きに溺れてしもた男です

半分は意地で伸した不精ひげ

高槻市 傍島 静馬

求人難二号の子にも眼をつぶり

大学教授だから親戚総代にされ

遠くまで馴染たずねて行く入れ歯

孫六つそろそろ年寄うとんじる

ウインクにボラれたことは伏せておき

大阪市 河井 庸 佑

もう寝えや親が受験の子に言われ

自動車免許取ったが信用されぬ腕

出して入れ学校せわしい春がくる

体づくり出来て勉強やや遅れ

大阪府 谷 沢 好 祐

教育費妻はパートで生み出す気

赤字赤字乙旗揚げてみたけれど

理窟よくこねて算数には弱く

俳優はいゝな殿にも社長にも

愛媛県 榎 紫 光

善行をほめてもらいに署へ呼ばれ

お人好し利用をされに又出掛け

妓には振られ魚の骨は立ち

美容院触れなば落ちん顔で出る

指の節ボキボキ鳴らし職がなし

青森市 工藤 甲 吉

思い寄せる人へやんわり雪つぶて

淡雪が降れば女に春の翳

松江市 小林 孤 呂 二

極刑がいゝね汚職と誘拐と

たかゞ交通事犯と悪るびれず

足を組む女の多く者となり

叙歎の世へ死にきれない人もあり

遭難のテレビニュースを炬燵で見

嫌な人五十五才となり給い

豊中市 林 夢 虹

北方の原野にカラスだけが棲む世界

キツキよ欲情という名の虫を食べておく

文明に触れ鶏無精卵を生む

食い飽きて鶏大空を忘れ

飼い馴らされた鳩だけが棲む都会

大阪市 今 西 章 雅

奥さんで持ててる家と俺を無視

文化国自衛と爪をかくさない

夫婦善哉出よかお惚け料くれる

京都市 室井 八 九 寸

習字作句足踏みのまま高寿の春

箸袋羅馬字自署の食べ盛り

口描きの画料輝く福祉寮

風船が結んだよい子京と伊勢

岡山県 横山 一 声

テレビ料理と言うのがパパの気に召さず

銀行へ不況をかくす新車で来

小松市 関戸 宗 太 郎

孫にキスされて恩給取りにゆく

大学をでてふるさとに職が無し

日曜のプランを言わず寝押しする

夜の蝶昼はパチンコ屋にとられ

石川県 高山 涼 髪

元市長自慢の髭と庭づくり

おおきくなったら家を建てると子に言われ



あわれにも白髪頭にかこわれて

美祿市 安平次 弘道

遭難の遺族へ雪どけまでが長い

妾宅で不況の話別れる気か

オタマジヤクシの受難学校の春休み

愛媛県 渡辺 曉 童

好きな型の女がやおらがむを出し

五十すぎた顔と自分に言いきかせ

金づるがつづけばいける年と知り

汽車のけむりも松原の景

野の夫婦夫婦随の如く見ゆ

宇部市 平田 実 男

ハンカチもチョークの匂いが滲む教師

サロンパスぐらいで効かぬ腰になり

醜聞と逆に人気が出るスター

小松市 浅野 芳 朗

恋人のエトだけが気に入らぬ母

かきわけて先に乗ったに座られず

運よくも知ってた巡査にひっかかり

押すだけという大人を馬鹿にしたカメラ

諫早市 川岡 靈 眼子

作業着の下に母なる乳が張り

過去誇るそれで千切った煙草喫む

触れもせんに女落ちんとす

貸付けの耳はくどきなたこが出来

富田林市 浅川 八 郎

職を棄つ

自己を捨て唯吾子の望の協力に

岸和田市 内藤 きさ子

ゆきやなぎ女ひとりわびずまい

あきらめることも世わたりゆきやなぎ

よく見ればひととこ春が来てる土

縁談がまとまりそうな借電話

倉吉市 奥谷 弘 朗

玉川と聞いてあきれ汚れよう

自分から下座ときめている小者

新築がいやに目につく二階借

兵庫県 遠山 可 住

マイカーのベテンへたわいない女

ベテンと知れば死ぬ純情がこわくなり

下座からきり上げて出る夜の町

花嫁の泣くだけ泣けば行っちゃった

兵庫県 河原 みのる

餅ひと白老いの力をためしてみ

此の家も入試の子かや夜半の窓

鮎釣りの動かず雪の城下町

熱燗の好み加減も後妻慣れ

あの脚に百万円がつく噂

姫路市 隠岐 不 醉

お宅の子 欲目にみても私立です

鳥取県 清水 一 保

年輪と思えばあきらむ顔のしわ

出発へ母の注意がまだつづき

子の誕生日

我が歳も忘れて次代の子を祝い

出雲市 中川 晃 男

将来の見込みありきつく叱られる

例えばの話で自分のことを聞き

松江市 柳 楽 鶴 丸

誘うともなく誘れるともなく一杯屋

私をくどいた頃の根気なく

友情出演から友情にひびがいら

兵庫県 大江 秋 月

阪急へ値段見にだけいて帰り

旅二日家で仕事の方がよし

金が無くなれば便りを子がおこし



大阪府 松田 半月
はかなくも死に行くとは知らず乗り

今治市 越智 一水

美しく曼珠沙華咲き貧の村

切れとまる稲刈鎌の凹みよう

雪どけのそこからてまり歌きこえ

竹原市 山内 静水

祝開店以来造花の埃あび

トランジスター鳴ってる日傭作業中

がり勉の甥頼母しい飲みっぷり

三校共合格親馬鹿さらけ出し

大阪市 森川 すみれ

敗残の過去を女はふりむかず

体温四十度險の中の亡母

新居浜市 小林 孝正

淋しさを狂ったように奏くベッ

夜風身に泌むよ自ら思慕絶つ日

靴ちびるどこまで自虐つづくのだ

A少年も母もの映画で泣いていた

熊本県 有働 芳仙

握手して接唇まではふみ切れず

暴行をした少年の泣きたい日

まんまるくおさめる酒が尖り出し
みぞれから雪になり傘をたたまん
燃えている方角を知り呑み直し

枚方市 宮川 珠笑

とまり木にとまってる間の恋をする

想像の自由テレビに奪われる

拗ねている顔へ煙を吐いて立ち

賢妻に男の甘さうとまれる

礼状の過分に粗品こそぐられ

京都府 西村 句楽坊

七十七福豆かんでまだ老いず

兄姉の年乗り越えて死を忘れ

喜寿迎え米寿へ時点置き更える

同舟近詠

東京都 富士野 鞍馬

いつしかに女房も母とおなじよう

大阪市 橋本 緑雨

両親の喜び新婚の云うがま、

長野県 高峰 柳児

白足袋をはけば師匠の眼がきつい

生きのびた倅せ保険をあてにされ

神様の威圧で寄付帳座りこみ

重役とひと足違った時差出勤

白書みな上品に愚痴ならべたて

親ももう折れて安産待つばかり

大洲市 米沢 暁明

飛行機にしてから寄らぬ日が続き

人生をこうもひがんだ過去淋し

駆けつけて上座に坐る服でなし

今治市 長野 文庫

下手でよい母の手紙のあた、か味

土と勝負している荒れた大きな掌

遊覧の雑兵城をふみにじり

三宝に載ってくすぐったいするめ

定年にしんみりとする次の人

定年を前に暫しの部長席

和歌山市 秋月 宏方

口髭は教育勸語読むタイプ

男三人寄っても株の話せず

金持ちできょうも庭師は茶をよばれ

今の世に得意まだある置業

下萌は草も生きてる意志表示



川傍柳初篇研究 (二五)

丸十府 高須啞三味
 岡田甫 前田喜代人
 川端柳風 岡崎重義
 藤井和雄 清博美

(安四満2)

となると、論外であるが。
川端二贊。後家の浮気を、さり気ない表
現で皮肉った句。

高須二礎稿丁寧なれど、後家に同情した
句とは思えず、後家の態度のハッキリせざ
るを「落度」なりと言ったので、何となく
不承知な様子などせず、きっぱり「恥をか
ければ」よかった、というだけの句。
前田二諸説をそれぞれに面白し。表現のた
くみさをとる。

清二この「後家の落度」は、姪嫁したこ
とと思う。藤井氏引用の

恥もか、せずさせもせずはつめいさ
というように利口ではなく、恥をか、せ
ず「させて」しまったので

今は何をか包むべき後家はらみ
(末四)

もう後家をやめねばならぬ腹になり
という「落度」になったのである。
(末二)

丸二「落度なり」と強調した詠みぶりか
らみて、清説に賛。
岡田二後家は貞操を守るべきもの……と
いう当時の思想から見て、姪嫁とまで小生
は考えず、貞操を破ったのが、即ち落度な
のである。口説かれて、男に恥をか、せれ
ば、貞操が守れたのに……というだけの意
と思っている。

299 たつきもしらぬ山中に切れた風
鼠弓

藤井二「たつきもしらぬ」とは「たより
もできない疎遠な」ということで、そんな

のように、衣料の需要ではなく、宣伝法
から、江戸中の家数を知っていたらう、と
解したい。

高須二越後屋、恵比寿屋など大呉服店の
大組織を見て、何となく、「これなら、江
戸中の家数も知っているだろう」と思った
句で、現代なら何でもないことを、当時と
しては、驚いていたのであろう。

丸二同。
岡田二高須説に賛、越後屋(今の三越)
の宏大さを見て、江戸の戸数(人口)の多
さを類推できる……というのだと思う。

298 恥をか、せめのが後家の越度也
門柳
藤井二「後家の落度」と言っているのだ
から、もちろん男関係で、

恥もか、せずさせもせずはつめいさ
(末二)

いやならばいいに若後家いけんする
(末二)

後家の髪この世でつかふ程は置き
る身としては
などはい、方で、まだ年も若く色香の残
る身としては

口説きい、やうに若後家取り廻し
(末三)

恥じしめて見たれど後家も好きな道
(前句、さびしかりけり)

とあっては、遂に「好きな道」とて、浮
き名も立てば
どうせもう言われついでと離れぬ気
となつてしまふ。初めはつきり断わつて
「恥をか、せて」おいたら間違ひなかつた
のに、と後家の立場に同情した句と思う。
口説かせて置いてあざける憎い後家
(前句、かく別な事)

297 江戸中の家数を知る呉服店
(18才)

眠狐

藤井二昔は、現今のように流行々々と、
毎年新しい流行物は売らず、娘は娘、主婦
は主婦と、一度買ったら長く大切に着たの
で、各家の衣料費は一定し、逆算して需要
の人口は算定できた筈。従って、呉服店で
は、江戸中の家数もわかったらう、という
わけで、つまらぬ句。

川端二駿河町の越後屋、尾張町の恵比寿
屋、布袋屋など、呉服屋の宣伝は大変なも
のであった。越後屋の貸傘は有名であつた
が、他に広告方法として、屋号を入れた手
拭を神社仏閣の水屋に奉納したり、ピラを
各戸に配ったりした。

家のあるだけは呉服屋配ってく
(タル一七)

枕紙江戸中配る呉服店

山中で、ふと切れ風を察見して、人里近い事を知って、何やら安堵めいた気持ちになつたのだが、この作者風号は、前に

135 ひんな子はしかられながら糸目持

175 人立の中からしやほんふいととび

などの句がある。この人さびしがり家と見える。俳味川柳で、味わいがある。

川端川古今集「遠近のたつきも知らぬ山中に覚束なくも呼子鳥かな」の文句取り。方角もわからない山中で、糸の切れた風を見つ、人に会つたような懐かしさを覚えたのであろう。

高須川川端説に賛。「たつき」は「たつき」(見当) 川金田一「古語辞典」川だから、文句取りのため、句は堅苦しい感じがあるが、句境としては、非常にいいところをつかんでいる。古川柳としては珍しい俳味川柳で、好ましい句である。

丸川同。句解としては、川端説がよい。礎稿が文句取りの事を脱したのは残念。しかし作者風号に対する批評は、中々うがっている。もっとも、本句は文句取りのために、高須説のように堅苦しく、折角の句境をや、こわしているが……。

岡田川諸説に尽く。

300 魚物をバたちものにして縁をきり

梅 枝

藤井川例により松川岡句。もちろん尼寺だからナマゲサモノは一切「断物」というわけ。すなわち、それを間接に言つたのである。三年のたちものにして縁をきり

(前句、やわらかなこと〜)

(安四桜?)

このたちものは「男」そのものをさした直接法。どちらも平凡な句。

高須川「鎌倉に軽も食わず三とせいる」

で、解に異議はないが、上の句の「魚物」は「ギョブツ」と読ませる気か? 松川岡は寺だから、というので「ギョブツ」などと言つたのか? それとも、何とかほかに読み方があるのか、知りたいものである。

前田川「魚物」は「ギョブツ」でよい。魚物を断つと吉野丸さびれなり

(傍三)

丸川賛。魚物の読み方はほかになし。特にこうした仏語調を使つたのは、高須説の如く東慶寺を利かしたもので、前田氏引用の句も川セガキの利かしてである。

岡田川その通り。

301 秋葉からあるいて帰るわるい風

秋 紅

藤井川秋葉権現は、向島三田と長命寺の間にある。境域ユウスイ、老樹ウツソウとして繁茂し、社側の高丘に登ると、隅田の流れ様々として眺望絶佳、春は花、秋は紅葉と、杖をひく人が絶えなかった。ところが、向う岸に吉原があるので、

秋葉から天狗がついて川を越し

(タル二二)

てしまふ人種が多かつたし、また

秋葉から船に三味線取りに遣り

(タル四)

となる花見船の景もあった。それで、今日はいよいよ風が強くて、舟が出ない。止むなく「秋葉から歩いて帰る」仕儀となつたという句で、そういう野心のあつた人種に

は、全く「悪い風」というわけである。

高須川礎稿至れり尽くせりて、蛇尾無用だが、「風が出て、舟がダメだから、歩いて帰つた」では、余り当然すぎる。それで、外骨さんは「悪いフウ」ではないか、

と言っている。一考を要す説と思う。

丸川一応礎稿の加く解するも、治定にや不安あり。

岡田川秋葉から吉原行きを予定していただけに、風のため渡し舟が出ないので、止むなく吉原行は中止。遊び好きの連中には即ち「悪い風」ということになる。

302 はらんだる物を井戸堀抱き上げる

秋 紅

藤井川例年の井戸さらいの時、井戸堀がゆくりなく「はらんだ物」を抱き上げて来て、長屋中の大騒ぎとなつた、という句である。その「はらんだ物」が人間か猫か、どつちとも言えぬのは不甲斐ないが、とびこんで直ぐでは、井戸堀が間に合うまいから、常例の井戸さらいの時、井戸堀が死体を発見して、抱いて上がって来た、と私は解している。

川端川私は、妊娠(もちろん結婚前)の投身自殺だと思ふ。

高須川「抱き上げる」だから、生きている「孕んだる物」でなくてはならぬ、とボクは思う。面目なさの投身としても、直ぐ長屋中の大ききわぎとなつて、直ぐ「抱き上げ」られたので、井戸堀にこだわつて、直ぐには間に合わぬ、などと考えるには及ばないと思ふ。長屋だから「井戸堀人足」もいたと見てもよいし、臨時の井戸さらいを

「井戸堀」と言つたとしても、古川柳としてはおかしくはなからう。

前田川「はらんだる物」は妊娠ではなくて、犬、猫類の孕んだものにとりたい。

「抱き上げる」面白くなるので――。

岡崎川前田説だが、犬猫の死体なら「つまみ上げ」て、抱くまい。また、人間なら重くて抱いて上がれるのではなく、繩をかけて引き上げるだろう。では、その他の「孕んだる物」とは、何であらうか?

清川はらんだる「物」が気になるが、私は妊娠にとりたい。

丸川小生は妊娠説。「抱き上げる」を、井戸堀が小脇に抱えて、つりさげた梯子などを上がつて来る所と見ると、「はらんだる物」の物も生きて来ると思う。もっとも余り文字には拘泥しなかつた古川柳子のことだから、それほど理屈っぽく考える必要はないと思ふが……。

岡田川猫の溺死体が浮いているので、井戸堀人夫を呼んだ場合。抱いて上がって来たのを見れば、水をたらふく飲んで、腹は妊娠の如し、という句である。

高須川犬、猫と一概に言つても、犬は井戸にとび込むことは、先ずあるまいから、猫か人間かが、議論のわかれ目だが、丸先生説の如く、文字にはデタラメであつた古川柳のことだから、重いから抱き上げられなかつた、などというのは議論外。また物か者かも、それほど重要視する必要はないと思ふ。結局「人」か「猫」か、だが、ボクは「人」の生きたまゝ(死体でなく)上げられた考えが、捨てきれぬ。それについ

てこの句を

はらんだる物を井戸掘抱き、あがる
と、現代調に読んだらどうか、という意見
も述べておく。諸氏の再考を乞う。

藤井 再考の上、私は高須・丸先生説に
手を上げる。

岡崎 私は、岡田先生説で納得する。
303 乳母ハ喰ひかけてあゝく大水だ
菅江

藤井 乳母は荒淫」という通念から、
最初この「食いかけて」をバレに解してみ
たが、少し無理と気づく。

乳母ちぎるうち座敷中尿だらけ
の小便版であらう。

高須 単純に「食いかけての乳母」で、よ
くはなからうか。

それ言わぬことか抱いて、ドーラダラ
で、預かっている赤子にソソツをされて、
あわて、いるお乳母さん……それだけ、で
あらう。

前田 高須説に賛。「食いかけて」は、
バレでなく、食事であらう。「あゝく大
水だ」は、大ゲツであるが、面白い。

岡崎 賛。バレ句にとるのは無理。たゞ
の生活句である。

丸 同。おちおち食事もしていられない
乳母も、なかなか苦勞だ。「あゝく大水
だ」には、些かこの歎息もまじっているよ
うに感じる。

岡田 古句というと、バレと考えるのは
禁物。諸氏大いに戒心せよ。

304 虎の威を古郷へかりるふといやつ

五連

藤井 江戸へ出て玉の輿にのり、旦那の
威光を振りまわし、得意になって故郷へ帰
って来たお妾に対する、故郷の連中の悪口
ではなからうか？

川端 古郷を親元と解して、妾の里帰り
か、或いは娘を妾に出して、羽振りのよく
なった家族への周囲の反感と思う。

高須 太いやつ」に、それほど重量感
が感じられないし「古郷へ借りる」という
言い方も、大人気が感じられないので、柳
雨説の如く「松坂あたりから江戸へ奉公に
来ている丁稚が、津の藤堂和泉守の行列に
ついて、無銭旅行する、太い奴」と、解す
るのが、穩当のようだ。

抜け参り片道虎の威勢なり (安 水)
という類句もある。

前田 柳雨説の無銭旅行も、面白いが、
単に「おれの国には、かくかくしかん」の
人がいるんだぞ」なぞと、虎の威を借りる
のではなからうか？

岡崎 虎の威を借る狐」のもじりで、
文句取り、確稿に賛。

清 特定的人物を詠んだものではないだ
らうか？

丸 高須説賛。本当の抜け参りなら、大
目に見られるが、抜け参りを装っての無銭
帰郷なるが故に「太い奴」が生きて来る。

「虎の威を借りる」はむしろん狸諺の文句
取りだが、この虎は伊勢津の藤堂和泉守を
さしている。

虎の尾をさくらの時はふんで行
花の山むかしハ虎のすみかなり
(タル二二)

藤堂家の祖は高虎、江戸屋敷は元上野に
あった。(のち柴井に移る。)
岡田 大井川の川越しの時など、藤堂家
のお供の連中みたいな顔をして、無賃乗車
(?) する手輩あり。そして、この男「故
郷へ借りる」だから、津の出身者というこ
とになる。すなわち柳雨説でよし。

305 箱の中に炙斗りすへて居る
鼠 弓

藤井 「箱」は箱入娘「炙」は四火患門
の灸、箱入娘は労働になる。労働は結核以
外に性的欲求の不満によるノイローゼ様の
症状もいふ。その手当てとしては、欲求不満
を満たしてやればよいのに、それには気が
つかず「炙ばかりすえてい」それでは、
本当の労働はなおらない。

妙薬があるのに灸の猫のやれ
(前句、引手あまたに〜)
(安二樓2)

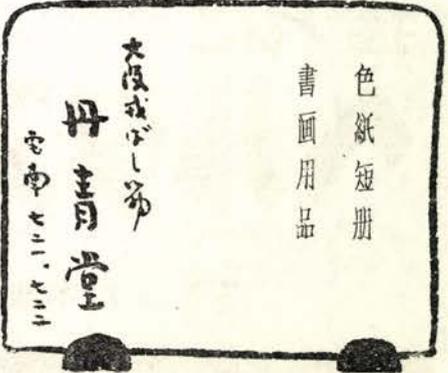
然し、心配無用
束にくるむすこ頼んで四火をすへ
(前句、おしつけにけり〜)
(安四礼2)

と物わりのよい親もいる。
高須 この「箱の中にて」は「箱の中
置いて」或いは「箱に入れておいて」で、
前に出た

178 振袖を四ツ目殺しにしてしま
(11オ)

193 深窓に十有九年やしなわれ
(12オ)

の垂流である。
(安二樓4)



前田 確稿に賛。「箱の中にて」とい
う表現が、川柳的で面白い。

清 二にかく灸では治らない。治すには
先ず箱から出すことである。

丸 箱から出しさえすれば治るものを、
何て愚な事ばかりしているのか……という
非難めいた心もくみとれる。

岡田 諸説に尽きる。
(18ウ)

306 三度の神正直帯をとくなり
水 砥

藤井 「三度の正直」または「三度の
神」と言つて、三度目は願いが叶うこと
になっている。その例にもれず、この里も初
会・裏・三回目となって、やっと帯をとい
て、くつろいでてもなしてくれろというだ
けの、つまらぬ句。

三回目よう／＼帯をときいしやう
(前句、てかしたりけり〜)
(安二樓4)

高須ニまたしても、妙な破調の句が出て来た。この「フシギに調子のおかしい句がある。サンドのカミ(六) ショウジキ帯を(七)とくなり(四)では、ゴコチない。初代川柳君も、案外新しがり家だったか? 前田ニ礎稿賛。三度の神正直一帯をとくなり、でよいと思う。

清ニ読み方は、前田説通り「三度の神正直」という俚諺がある。その文句取りで、廓の三会目を詠んだ句である。

丸ニ「三度の神正直」とは「三度も占って違わなければ確実であるとの意」と、藤井博士の「諺語大辞典」にある。三会目の句で、俚諺をきかしただけのつまらぬ句、

岡田ニ同。この「川傍柳」あたりから、五七五の定律を打破しようとした、新味を狙う破調の句が多くなっている。そのつもりで読まれたし。

307 根生わるにしやべらせ御仕宣

水 砥

藤井ニ嫁だから、まだ結婚早々で、思事も十分に言えない。「根生わる」は小姑か、或いは口の悪いので評判の男か? いろいろと顔も赤らむような気をまわした風評を言うので、嫁はたゞ黙ってお辞儀をするばかりだ、というところか? どうも、自信のない解だが……。

川端ニ「根生わる」は姑だろう。結婚の挨拶に姑が近所を紹介して歩き、嫁は頭を下げるだけの意か? 姑の忠告(意地わるな)に、口答え一つせず、ハイハイと頭を下げている嫁か? 古川柳には「姑の嫁いじめ」の句が多いから、後者と思う。

高須ニ「コンジョウわる」とは、姑のこ

とであろう。それに「しやべりたいだけ、しやべらせて」嫁さんは、たゞ「叩頭」しているばかり、という句だから、嫁さん引き合わせの句で、別段他意はなからう。

丸ニ高須説に賛。

嫁の礼おふくろ斗しやべりぬき

(タル七)

嫁の礼しよさいの無いがついて出る

(タル九)

岡田ニ同。

308 毛氈を側からめくるつらい事

一 甫

藤井ニモウセンの句を探がすと

毛せんでおっぱらはれる百さじき

(タル一六)

毛せんでさしきを払ふ油むし

(タル一)

の両句を見つけた。芝居で定員の都合上、毛センの席から毛センをめくり、百棧敷(百文の下等席)として、詰め込まれたのではあるまいか? 「油むし」というのは、油虫扱いをされた客のこと。――但しこの解、もとより自信なし。

実は、初めお祭りで、金屏風と毛センを借りたところ、早々入用な事が出来て、返してくれと「めくりとられる」所と解していたが、めくるといふ動作から、芝居の棧敷のような気がする。

川端ニ前解と思想が、自信なし。

高須ニこの句は「売れ残り女郎」の句と

思う。というの

辛いこと花菱の上で四ツを聞き

(安八翠2)

はだか王らしく引ケ四ツまで座り

行灯へ遠く四五人売れ残り (明八礼6)

むえんほうかい壁ぎわに五六人 (安元松1)

売れ残り御尤もなが二三人 (安五天1)

売れ残り真ッ赤な奴が五六人 (寛元柳1)

等々で、もう大引ケで張見世を終わるので、毛センをた、まれるのである。

引ケ四ツを梯子で聞くはめつけもの (明三梅2)

の「すべりこみセーフ」なんてのもあり、幸いに「つらい」思いをせずに済んだ。

前田ニばくち場で、いんちきが見つかって、いんちきの隠し場所である坐っている毛センをめくられる、風景ではないだろうか? 「めくる」「つらい事」に、そんな感じをさせられる。

岡崎ニ高須説賛。張見世で安女郎は素豊に坐っているが、上妓は毛センを敷いて坐っていた。結局、高値なので、売れ残りがちである。

丸ニ同。

無いものハ金ちうさんが売れ残り (タル一六)

岡田ニ売れ残り説に賛、但し問題は、毛センを敷くのは、張見世の正面の三分の上妓だけ。その上妓が売れ残るか? 「わきからめくる」とあるからして、そのワキの花ムシロに座している一分女郎などが売れ残るのか? おそらく前者と思うが、まだどうもその辺がハッキリしない。

ふきげんな

パパは疲れているのです
だんまり、むっつりのパパに
ヘルタスを!

筋肉の疲れに
内臓・細胞の疲れに

ヘルタス

レ・アスパラギン酸塩製剤 錠・内服液・バーモント

P 大日本製薬





らんごく帖

堀口堯人

らんごく、と云うのは、ランブの下で本を読むことだ、と思つていた頃、はじめて「金色夜叉」を読んだ。明治の末年、小学校へ入学するかしない年頃であつた。特に、それを読もうと志して、読んだのではない。近頃の青年の科白である。さすがに、こんないろいろまた、とは言わず、こんじきやしゃ、とまちがわずに読んだのは、そこまで読書力があつたからではなく、その頃既に、世上の評判になり、芝居にも上演されていたからである。袖珍本と云うたものか、小型の六号活字一段組で頁数は五百頁ほどあつたかもしれない。その後、間借していた、田舎寺の書庫から、初版本を見つけて耽読した。初版の方は「国定教科書」の活字の大ききで、口絵には、熱海の海岸の松の下で、貫一に蹴られたお宮の袴の裾から赤い

ものが、ちら／＼していった。画家は鑄木清方であつたやうに思うが、この記憶はあまり確かではない。こんなわけで、高等小学校を卒業するまでには、この小説の筋書をつかり暗記してしまつたのである。この事に関するかぎり早熟の天才であつたかもしれない。その後「中里介山が大菩薩峠」の序文の中で、未だ男女の会話を描写してこれほどの名人はない。と激賞していることを知つたが、私も全く同感である。

塩原温泉で静養している高利貸問貫一が、心中を助けてやつた芸者上りの年増に、給仕をしてもらいながら、玄人の恋愛観を聞くところがある。見惚れ、気惚れ、底惚れ、の三つにわけて、見惚れとは十七八才までの芸者が、顔がきれいか、姿が美しいとかで思ひよせること、気惚れとは姿かたちばかりでなく、様子がよいと

か、気性がさっぱりしてるとか、気心に惚れるや、心理的な恋愛のこと、こゝまでは浮気と云うべきであるか、底惚れとはそれから先その全人格に惚れ込んで、真底から好きになつて、どうにもならなくなつてしまふこと。そこまで惚れるやうになるのは、恋愛の甘いも酸いも味わいつくして年増になつてみなければわからず、真の恋愛とは、底惚れ、のことである。と、説明する一節がある。「金色夜叉」で私が一番好きなのは、このところの会話である。

富山の宮から、貫一への長い長い手紙で、終わりになつていゝや、実は、未完結であるが、こゝまで書いたところで、作者尾崎紅葉は逝去したのである。紅葉の弟子、小栗風葉の解説によれば、その後、宮は狂人となり、富山家から離婚される、今は、鳴沢の宮となつたかつての恋人を、俚に乗せた貫一は青山坂を上つて行く、脳病院へ入院さす為である。その途中で、おりから散歩中の旧友荒尾謙介に邂逅する。三人ハツと顔を見合わせ、惘然たるところで幕、とするのが、作者の構想であつたさうである。私は、そこまで書けなかつた方が反つてよかつたと思う。宮から貫一への、切々たる慕情を訴えた手紙のまゝになつてゐる方がはるかに小説としては面白いのではあるまいか。

問貫一のモデルは、明治最初のお伽断作家巖谷小波であり、荒尾謙介のモデルは、独乙文学者竹友藻園と聞いているが、事の真偽は知らない。それよりも、小波が自作の「日本お伽断」を、集大成した時、ほとんど現今の、新かなづかい、で書いている方が、はるかに興味のある事実である。この本が出たのは、明治の終わりか、大正のはじめ頃と記憶しているが、を、と書くべきところを全部、お、になつてゐた、と、思う。あまり新しすぎて世に容れられず、その時はそのままになつてしまつたけれども、彼は、新かなづかい、の先覚者であつたのである。

私は、新かなづかい、は大きらいであるけれども、小波の時流に先んじて実行した、文化精神は偉大であつたと敬服し、真の知識人は斯くありてこそ、と、思う。今時、文部省の尻馬に乗つて騒ぎ立てる連中とは、同じ新かなづかいでもわけがちがうのである。彼は創案であり、これは模倣である。

「金色夜叉」につづいて読んだのは「椿説弓張月」であり「南総里見八犬伝」である。これ又、小学校の図書館にそれがあつたからである。それから、北原白秋の「邪宗門」や堀口大学の「月下の一群」を拾ひ読みしたが、あのまばらに大まかに印刷された詩集をひもどく時、何だか、禁断の書を開く気がして、心がふるえたものである。何故、ふるえたのか、「邪宗門」という題名のもたらす、ふんいき、か、それとも、きりしたんばでれんのことばがかもしたした異国情緒が、感受性の鋭い少年の心を刺激したのか、今もつてはつきりわからない。

高等一年生の時、はじめて自分のこゝつかいで、詩集「旅人」を買つた。それより先有本芳水詩集」が出版されたけれども、当時人口五千あまりの田舎町から小学生が東京の本を取よせるなんてことは、考えられないことであつた。とても欲しかったがしんぼしていたのである。ところが、「旅人」が出版されるに及んで、とうとうたまらなくなり、町の書店に取次

を依頼して入手した時の嬉しき、私は、この詩集によって、詩とは、五七調七五調や七七調の定型ばかりでなく、自由律調の別世界のあることを知らされたのであった。

若狭路を丹後に越ゆる

春の日のわれも旅人

或時は丘にのほりて

入らぬの色にこがるる

私は、芳水の詩のこんなところが六十過ぎた今になっても愛誦している。明治時代、市制による都市が一つもなかった「若狭路」のやうなところが活字になつて載せられたのは、とても、珍しい出来事であった。しかも、芳水先生の、丹後へ越した坂道は、少年の私も亦、歩んだ道ではないか。汽車のなかつた高浜から、都会の文化に接するには、約十六キロの国道を、軍港町の新舞鶴まで出るよりしかたがなかった。だから、私は、この詩が載つた「日本少年」を、むさぼり読んで涙したのである。

夏目漱石のものを讀んだのはやはり少年時代、小説集「鶉籠」が、はじめてである。この集には「坊ちゃん」や「二百十日」があったように思う。その後、漱石物は、隅から隅まで繰返し讀んだつもりであるが、それでも「文学論」や「文学評論」の、英文まで讀みこなせたわけではない。これ亦、翻譯物としてははじめて讀んだ、ロマン・ローラン著、戸川秋骨訳「ジャン・クリストフ」の中の

音譜と共に、これからでも勉強しなければならぬ難物である。漱石が大学教授を辞任して、一介の小説屋となり、朝日新聞の客員となったことは、仮に、田中大蔵大臣が辞任して浪曲師に成つたほどの、社会的問題となる異変であつたらしい。はじめて載せたのは「彼岸過まで」で、あつたらしが、当時の校正係楠木吉君が、そのグラ刷を大切に保存していたことによつても、如何に大事件であつたかが証明される。私は後年、

恵比須町に在つた、愛文社印刷所の楠氏から、保存されたグラ刷を見せられてびっくりしたことがある。朝日新聞社に、大学教授夏目金之助を引抜かれたので、驚いたのは、毎日新聞社である。これに對抗すべきスターを引抜いて、ライバルに一泡ふかせなければならぬ。白羽の矢を立てられたのは、医学博士文学博士森鷗外とあつては、対抗馬として申し分はなかつたが、その創作が「淡江抽齋」とあつては大変である。私は、現在に到るまで、これほど難澁な小説を讀んだことがない。否、とう／＼途中で投げ出してしまつて讀了してないものである。克明であり達文であるがどうしても興味をもつてついて行くことが出来ない、世にも不可思議なる文章である。この長編を終りまで連載した、当時の毎日新聞の担当者は偉大であつたが、校正係にとつては世にもおそるべき難物であつたらしい。この校正史上未だに残る難物を手がけ

て完了せしめたのは、数年前まで神戸元町で画店を営んでいた、私の知人大塚銀次郎氏である。若き日の彼は、毎日新聞校正係であつたのである。

漱石の作品では「虞美人草」が一番好きである。珍しく、通俗小説のやうな匂いがして、彼自身としては最も嫌いであつたそうであるが、私はとても好きであつて、ある時代には「神の代の空に鳴く金鶏の、翼五百里なるを一時に縛して」と富士を叙した一節の如きを、暗誦していたものである。又、新興川柳誌「水原」へ投句する際、宗近北斗星、なるペンネームを使用したのが、これは当時「虞美人草」の中の、宗近君に私淑していたからである。現在、梅田コマ劇場で活躍している男優、甲野洋君の芸名の出所も亦さうであるらしい。小説の中の、甲野と宗近君は親戚であり親友である。

信貞、とそれ／＼の珠玉を握つて生まれた八犬士が、波瀾万丈の生涯を展開する、大伝奇小説であるが、その中ですら、女賊であるが、その中では、女賊であるが、旅人を巫山の夢に誘ひ込み、佳境に達するやその舌を嚙切つて死に至らしめ財物を奪ふ場面は、おどろくべきものである。その如きは、エロチックでありテラスクではないか。それよりも私は、むしろ、現代文学の中に、古い道義的感傷を感じている。

先ず漱石の「坊ちゃん」である。江戸ッ子的正義感が松山地方の因襲と衝突するところに面白味がある。つづいて、「吾輩は猫である」には、苦沙弥先生の社会的正義感が、ところどころで、すかたんに発揮され、そこからエーモアが漂よつてくる。「虞美人草」の中の、甲野未亡人の、上品にして陰險なる行動は、大衆的反感を買ひ、それが正義漢宗近君によつて痛撃されるところに、愛読者の人氣がひそんでいゝのはあるまいか。このやうな、道義的感傷による人氣は、必ずしも日本の小説に限つたものではない。その最たるものは、デューマの「モンテ・クリスト伯」である。時めく検事総長に対し、計画された証物物件を提出して旧悪を暴露して行く法廷の場面を一読すれば、我々の正義感が高調して快感を感じてはいないか。ユーゴーの「レ・ミゼラブル」ジャンバルジャンの神性不滅とその愛によつて綴られた大ロマンスである、我々の道義的感傷はこゝでも大いに刺激される。私はめつたに本を買わない。もちろん経済的事情からであるが、そのほかには、家が狭くて置き所にも困るからである。従つて、週刊誌や流行小説の如きはほとんど読まないことにしている。それにもかゝらず、誰かが持ち込んで来てくれる、何となく読まされることがある。最近では北杜夫の「檢家の人々」を讀んだ。これは大作である。大河小説である。東京青山で精神病院を経営する一家族を中心として、明治大正昭和三代にまたがる大庶民史である。私は、トルストイの「戦争と平和」にも比すべき力作である、と感心した。感心したが感銘しなかつた。否、感銘出来なかつた。何故であらうか。「戦争と平和」には、神が存在した。神の子としての人間が生きていた。「檢家の人々」には、神が無かつた。人間の子としての人間が生きていた。人間の人間が、生々と描かれていた。しかし、私の道義的感傷を刺激するやうなところは無かつた。

私は「檢家の人々」を、日本文学史上記録すべき傑作の一つではないか、と考へている。そして、私を感銘せしめるところがなかつた、冷酷なるリアリズムについて深く考へている。道義的感傷、それは、明治文学青年の夢であり、今となつてはマンネリズムの中の泡沫にすぎないのであろうか。

・特集・

私の作句の焦点



① あなたの作句の焦点を、どこに、何に、おかれていられますか。

② 二、三の例句を自己の作品からお示し下さい—
というアンケートに答えていただきました。

(編集局)

川柳は おどろき

後藤 梅志

(一)人間の社会というものは、また自然のなせる、いろいろのものは、実にたくまざる、おどろきの連続といつてよいと思います。

つぶさにみれば、四季の花が咲くのも、人が生まれるのも、死ぬのも、誰が何をしなくとも自然におこります。天の配剤というのでしようか。その中で人はあがき苦しむ、悶えて、日々をおくりまします。何か商売に没頭するとか、研究に従事するとかしておると、月日の経つのも花が咲いたのも、忘れておりますが、ふと我にかえると、自分の身辺が非常な速度で、変遷しつつあるのが分かります。私はここに作句の焦点をあてているのです。古句に

淋しいのも秋おどろくのも 秋の空

というのがあり、ただ見れば何の工夫もなく出来た句のようにも見えますが、その人の世の中に生きる態度が真面目であれば、あるほど、太変な哲理を含んだ句であることが分かります。

また石川啄木の短歌作品には、秋の空廓として影もなし あまりに淋し鳥など飛べ
というのがあり、非常によく似た作品のようでもあります。啄木は当時の熱心な革命思想家であり、情熱漢でもあったので、「澄み切ったひろびろとした秋の空」には堪えられなかったのだでしょう。ここに人間の苦悩があると思うのです。世の中に大志を抱けば

抱くほど苦悩が多い。これは人間の宿命なのでしょう。

(二)私はまた、音の世界を愛します。

地球はまるいものです。人間の細胞もまるいもので出来ています。円というものはすべてこの地上のものを支配している。大きな自然現象でもあるのです。だからこの「音」というのは愛すべきもので、一つのまるい輪廓のなかで発します。例えば「鐘」の音です。また、外を打つと、音は、まるい鐘の中で響き合って妙音を発する。実に自然の妙です。

また、「リズム」というのも音の一種です。人間の世の中というものは、実にリズムミカルに出来ていて、このリズムが破壊されるときはつねに調子が狂い勝ちのものです。人があるくのも、警笛が鳴るのも、あるリズムがあります。体内の心臓の鼓動もそれでしょう。タイミングというものは、このリズムを外さないところにあり、脳細胞もこれによって支えられて、細いまじでしょう。

近い例では、出稽古の際、急に家の外で犬が吠え出したり、大工がトントン釘を打ち出したりすると、語は止めて待つ外はないのです。というのは語の拍子はハツの拍子で出来ていて、これは自然の理にかなったもので、奇数の音をきかいます。

作句の場合もこれと同様で、腹を立てたりすると、自らリズムを破壊する結果になる。この場合、雪のあしたの雨垂れの音などは、有難い救い主です。

こうして音の世界に敏感である

私の作品はつねに「音」を求めています。

(三)作品例は、すべて何かのおどろきをもって迎えたもの、近作では

力遣入らねば 老女さえ演れず ①
聖歌隊長屋の人を驚かす ②

幼稚園火災お寺も遂に焼く ②

初詣らしい格子のひらく音 ①
(これは元旦のまどくらの朝のことです) ②

旧作では

こぼれては咲きこぼれては咲き朝顔の ①
元旦のどこかで笑うこえがする ②

人間を対象

布部 幸男

①作句の焦点はもちろん人間を対象。そして特に人間のこころ。ただし今日只今の空気を吸うて人間であり、それを意識していることが眼目。

②手もとにある柳話からそれを採りあげる。
あるときのはがき一枚人を刺し酒たのし溺れたところにつづく道しようむない女(靴下)下がり妻ありて秋刀魚の顔にやや似たり

粥に水足してもフタを持ちあげる
自嘲や自描句には飽き飽きしました。特定の人間にむかって親愛を示したり、握手を求めたりする気持ちですが、時に唾を吐きかけ

たいような衝動の句もあります。「ひとりたのしむ」という作句の境地はつとめて避けたいと思いがら、やはりその弊に沈むようです。句によって心のつながりを求めてゆくという気持ち、共感の人たちがたくさん欲しいという気持ち、そのために自分自身の句境をゆずってはならないという気持ち、そんなところのまん中に、どつかと坐って威張っていたいというところでしょう。

口語定型・庶民精神

湯川 銀界

①柳俳の性格を基本的に帰納して考えると、その基盤はA、川柳。口語定型、庶民精神、B、俳句。文語定型、風雅精神、を露露さすジャンルと考えて差支えないと思う。この基盤を常に反省しつつ、その長所、短所を補い、感激に普遍性を与えるよう心掛けていく。実際問題としては、可なり自由な表現型式となる。

②橋桁沈むタンブの後に従き
函数の疲労寿司だけ通る喉
ひしめて無実の紫斑期に夕に

自分を表現

中野 懐窓

①川柳作家である僕は柳柳によって、自分と言う人間を可能な限りに表現す可きだと思っている。恰も、歌人が短歌で、俳人が俳句で、己を詠うのと違わない。然し短歌は兎も角として同じ十七音を基準とし、同じ様に人間生活や心情を

作品化した俳句とこっちゃんなる可能性があり、最近益々其の傾向が濃くなって行くのもやむを得ない。

然しだからと言って、其れをたゞ見送って生きているのでは折角永年川柳家として生きて来た誇りが許さない。作句の焦点をどこに置くか、ひと口に言って、物や出来事を見る角度の相違、今一つは表現文体の特殊性に求める可きと思つてゐる。以上葉書一枚で答えるにはこれが精一杯である。

②晩学の伸びずれば又塔が見え秋暮れて千本の矢を背に違わされ エスカレーター買つてくれますかと問わず

オリジナルな抒情を

早川清生

正直なところ焦点を考えて作句してゐるわけではない。川柳人である限りその作品は、一応自身身を描写したものと、社会性の強いものとに二大別できるだろう。五十路を勤めひとの家の裏通る掃除婦のひとつつづつもつ砂煙 將軍の多くは床の中で死にいくさすむたひに女のべに濃く

どんな場合でも作品の根底にあるものは作句以前の作者の姿勢とか思想とか、形成された人間性そのものであって、あえて焦点を定めるまでもなく、作者の全人格がおのずから作品に流露する。私自身を描写した作品の中では、私は

いろいろな仮面をかぶつて登場する。老人になったり、女になったり、さまざまな職業人になったりするが、それらはいずれも私の一面を具体化したものである。川柳は究極的に自己との対決であり、知的な抒情を追求するものであると考へているが、雑誌に発表される作品のおびただしい類型はどうだろうか。

作句の焦点

今西章雅

私は川柳を一個の時代相を表現する詩だと考へてゐるので、むしろ作者不明の方が面白いのではないかと思つてゐる。従つて私のテーマの選び方については、これと言つて焦点がない。強いて言うならば、政治や社会や家庭で人間がかもし出す愚性を追究するのが川柳であると思つてゐる。愚性と言ふのは芝居等に於ける間と同じようなもので、それが巧みに作句出来た時は文字だけでなく余韻として笑いが生まれる。これが人間対人間のクッションとなるのではなからうか。

それには出来得る限りしゃべり言葉で作句したいと思つが、これが仲々難しい。句歴六年漸く型だけは川柳らしい物は出来るようにはなつたが、流水のような句は殆ど出来ないうし、自分の個性がにじみ出るよ

うな主観句も思うように出来ないう。したがつて私の句は客観句が多い。これは私本来の性格かも知れない。現在の私は秀句が出来た事に越した事はないが、それ程の頭もないうので、柳歴十年目にはどこかの柳誌で選をされたものが、一万句になるよう努力してゐる積りである。

短い句歴中で私の敬愛していた豆秋さんや文蝶さんが他界せられ、理論家の亜鈍さんも眼疾で尾道へ帰られ実に淋しい。それに手はどきをして下さつた堰子、十哲両氏もどうされたのか、最近殆ど作句を停止されてゐるのはどうした事だろう。

兎も角私は雅号よりも、作句数をふやすのを念願としてゐる。数を作つていたらその内にはとんびがたかを生むように秀句が生まれるかも知れない。唯私は川柳を愚性追究の詩だと考へてゐるので、この方向に進むだけである。

尼僧大学流石に学生婚聞かず 楽焼きのかまへ狐の通り雨 街の市場覗けばものにシユンが 無い 温泉マーク不倫美化するかに並 び 温泉水はエッチと十才の女の子

歪んだ世相への公憤

本多柳志

俳句は感動に依つて生まれ、川柳

は感興に依つて作られる。と言う意味の事を或る川柳人から聞かされた事があります。そうでもある様でもあるし、又それでもない様にも思ふのであります。作家が作句の焦点をどこに求め又、どんな事に作家としての感興をもつかは、作家夫々の個性や嗜好に依つて違ふとも思われませんが、私の場合毎日の生活環境の中に或は又、見た耳聞いたりする色々な社会事象や、人事現象の中から何か狂つてゐる、それでいて其の状態の中に、生活する人達や社会が少しも、おかしがらなげばかりか当然至極と言つた傾で、見すこしてゐる事に大きな感興を催すのであります。

ニッポンの政治あちらへ聞きに行き 独立国である筈の日本の政治家が何かといへば、あちらの感興を気がしたり、国会の冒頭でやる首相の施政方針演説の原稿までが、一応あちらのOKを取つてからでないと本決まりにならなかつた、と言う様な信

じられない馬鹿げた事に、憤りと言ふよりはむしろ滑稽をさえる感じなのであります。

事故死又五人小っちゃな記事になり 説明の必要のない程おかしな社会であ

ります。死亡ゼロの方をおかしがつたり、人々の話題になると言う様な、変則的な世相に私共は、何ともなくなつていつてゐるのでしようか、たしかに之は唯事ではないのであります。私は川柳人としても又市民としても、大きな矛盾と言ふよりは一種の公憤をもつてあります。

牛歩戦術丁度時間となりまして お手盛は歳費だけではない白書 政見を聞けば住みよい国になり オメガァの手に賞上げのプラカード

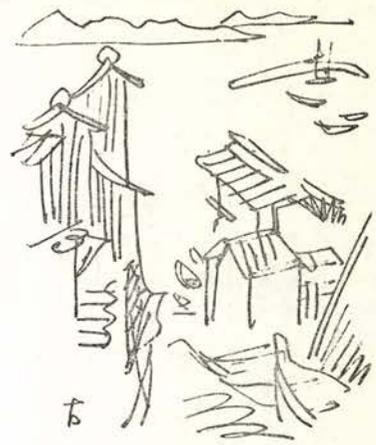
新しい大臣の名で許可が下りて見ますと、私の作句の焦点は狂つた様な、それでいてそれがあつても正常な顔で横行してゐる、歪んだ世相への公憤の中に、川柳人としてのユーモアを発見する所にあるもの様であります。



結婚式場 長生殿

近代的な設備をととのえた 関西一の結婚式場 貸衣裳も豊富にそろえております ● 6階

大阪日本橋 **松坂屋** TEL 631-1171



江戸川柳と紋章

阿達義雄

〔武家紋〕

川柳点に詠まれた武家紋章吟の数が、初代川柳の時代に限っても甚だ多いことについては別章に於いて述べた処であり、この傾向を端的に示すことは困難なことである。

然し「柳多留」の中の安永川柳点の武家紋章吟を見ると、如上の傾向の一端を見る事が出来る。

「柳多留」の宝曆明和吟にあっては、武家紋の句に詠み込まれるのは、先ず偶然的な現象であったが、安永吟にあっては、武家紋を意識的に詠もうとする傾向があり、これは、安永期に入つて顯著になつて来た狂句的な表現法を便として、拍車をかけた様に思われるし、一面に於いて、この現象は川柳点が知的に詠まれ、又知的な句が好まれるに至つた反映とも見られる。なお、一歩進んで考えるならば川柳作者群が下層階級より次第に当時の知識階級に移行しつゝ、あつた証左ではあるまいか。拙稿の「何印川

柳子」の続出や山の手川柳子の強大化などもこの点を有力に裏付けるものであらう。

安永期の紋章吟で「柳多留」に多く見えて来たのは平将門の繫馬の紋で、馬だからというので「じゃんく馬」として戯画化しているものもある。いずれにしても馬と表現していることは、

○下総につないだ馬のやかましき (一一・二二・一一)

○将門は下総に居を占めて乱をおこした。

○人喰らひ馬に純友口があひ (一一・二三・二四)

○藤原純友と共に比叡山に登り、そこから小さく見える京都の御所を見下して謀叛について語り合ったといふ。

○じゃんく馬に常陸の伯父御喰ひつかれ (一一・二五・二六)

○伯父の常陸大掾国香は将門を討とうとして、反つて滅された。

○放れ馬より騒がしいつなぎ馬 (一一・一九・一五)

○生き馬の目を秀郷は抜いた人 (一一・二三・三六)

○将門は依藤太秀郷に射殺された。

右の句によつても知られよう。将門がその紋によつて詠まれたのは、既に宝曆以来のことであつた。即ち、万句合には、

つなぎ馬関八州の豆を喰ひ (宝十一・仁一)

じゃじゃ馬を書いて不首尾な御祐筆 (明七・梅一)

いづれも紋章の馬を滑稽化の材料にして、俗説を詠み込んだゞけである。

次に源氏の家紋笹龍胆を「曾我物語」八巻の「富士の狩場の事」に結びつけた句に

○いのしゝに笹りんどうの絵符を立て (一一・二二・四二)

というのが見えるが、笹龍胆は北条三鱗

紋と共に明和万句合に既に詠まれている。即ち

頼家の鱗は笹と三つ鱗 (明二・礼三)

○五月の節句に立てる鱗には母方の紋と父方の紋がつけられた慣習に立脚した句。

○従つて、北条三鱗の句としても、
○鎌倉の汐干鱗がしまひなり (一一・四二)

右には鱗としかないが、勿論、これは三鱗であつて、北条執権職も北条高時を以て全く滅びたことを「鎌倉の汐干」の縁語として狙つて詠んだものである。

この頃の掛詞の流行は武田の四菱紋の句にも見られ、「秘し隠し」を「たけ田菱」にかけた上、

○たけ田のからくり三年ひしくし (一一・一八・一四)

○大阪道頓堀の竹田・近江の「からくり芝居」もかけてある。

「武田のからくり(策略)」を「竹田のからくり」(糸仕掛けの人形)に掛けた句であることは、「新增犬筑波集」の

都より甲斐の国へは程遠し
お急ぎあれや日も武田殿

ふしんをば今日わり菱のひしめきて

などと同趣向であり、「柳多留」百二十篇にある

からくりで出着た床着の武田菱 (一一・二〇・〇六)

などによつても知られよう。

○明智桔梗は明智の三日天下に結びつけ、
○洛中に桔梗の花が三日咲き (一一・二二・三六)

と譬喩的に表現されている。
真田の父子兄弟は関ヶ原合戦や大阪の陣

に關係して詠まれ、その紋の六連銭を以て表わし、

○ 銭の遣ひやう大阪知らぬなり (一六・15)

○ 銭がなくなつて大阪しまひなり (一三・25)

○ 六文の銭が切れると負けになり (一一・39)

○ 種銭が関東方に残るなり (一一・39)

(一五・36)

右の様に明らかに真田と言わず、その六連銭に因んで擲捨するやり方は、その根本に於いて江戸っ子の洒落を喜ぶ性質から発するものであり、紋章吟の家名代置は皆これである。

家紋を以て、右の手法で詠まれている安永吟の徳川時代の諸侯を次に列挙してみる、

家紋	知行高	姓	句数
九曜星	五四万石	細川	一
黒餅	五二万石	黒田	一
違鷹羽	四二万石	浅野(広島)	二
萬	三二万石	藤堂	三
三階菱	一五万石	小笠原	一
源氏車	一五万石	神原	三
違鷹羽	五・三万石	浅野(赤穂)	三
梶葉	一万石	松浦	一

延享四年八月十五日、月並の拝賀のために千代田城に諸大名が登城した際、細川越中守宗孝は殿中の大広間に於て、板倉修理勝診によって斬り殺されたことを、細川九

曜星の星に因み、又、当夜は十五夜なので

○ 月あきらかにして星は隠れたり (一一・35)

と漢文もどきの文句で詠んでおり。右は安永二年の句であるが、安永九年六月の万句合には九曜星をもつと明瞭に出した「其の夜の月に近い星九つ出る」と詠まれている。これは「近星」の出るのは災難の前兆とされている俗信を利用した句である。

又、安芸浅野侯の江戸上屋敷が霞ヶ関の路を隔て、黒田家の上屋敷に隣接していたので、

○ 真黒な餅をば鷹には見せて置き (一八・27)

と、一句の中に黒田黒餅紋と浅野違鷹羽紋を詠み込んだのであった。なお、次の助鷹も赤穂の違鷹羽を援助するといっているのであるから安芸の違鷹羽であろう。

○ 十四日助鷹も出た噂なり (一四・28)

三階菱の小笠原と云えば儀式典例に関する故実に通じた家柄として知られているので、

○ 御紋からしてかどびしな小笠原 (一九・9)

とは、「かどびし」に敵めしい作法をかけて小笠原の家柄を言い現わしたのである。

藤堂屋敷の跡が寛永寺にされたことは既に述べた処であり、

○ 萬の跡こんく／＼瑠璃の殿づくり (一六・3)

○ 萬を引き抜いて桜を植ゑるなり (一一・9)

この藤堂家の本国は伊勢であるから、その

の帰国の行列にからまって行けば、道案内もいらず、しかも道中安全に伊勢参宮が出来ることに目をつけた川柳子は、

○ 抜け参り萬に取りつき登るなり (一一・21)

萬の蔓として縁語仕立に作句している。紋章の草木・天象は縁語として利用するに便であり、紋章の器物は滑稽化の材料となり易かったということが一つには紋章の吟法を発達させた所以であり、又一つには現実の大名の姓氏を句に詠み込むことを忌避しようとしたことが、之を益々助長したのもと思われ、正式な呼称でない砕かれた紋章語も反復吟詠につれて熱心な川柳子には周知なものになっていたのであろう。

神原の源氏車が高尾の紅葉と共に詠み込まれた句は既に示した処であるが、これは更に車留、車座という変態句を発生させている。

○ 運のい、高尾は車留になり (一七・23)

○ 車座の女の中に高尾出る (一九・18)

右の句が仙台高尾でないことは言うまでもあるまい。又、家紋の(源氏)車の句が伸びて姓の神(原)の句が萎縮して了ったのは、徳川四天王のいたる姓を憚って避けたわけではなく、車は嘲笑のよすがとして便であり、神では嘲笑に不都合であったためかと思われる。然し、ごこちない姓、又忌避した方が無難の姓をなるべく避け、次第に田舎自在の紋章語に目をつけ出したことは確かである。

それにしても赤穂鷹羽の句は紋章句の中でも最も陳腐なのではなからうか。

○ 老に富士二には鷹の羽の夜討也 (一三・5)

○ 餅をかはぬのが鷹の羽の落度也 (一四・19)

柳橋辺の船宿から猪牙に乗って吉原へ急ぐ蕩児にとって、松浦屋敷の椎の木は風流な景物として眺められ句として多く詠まれているが松浦家の紋が梶の葉であることなどは全く拘りのない存在であったであろう。

○ 梶の葉は椎木程に洒落ればなし (一九・26)

金貨幣の桐が武家紋から由来しているか否かは問題があるとしても、次の句も安永期のものである。

○ 跡のない証お袋さかさ桐 (一六・26)

逆桐の小粒は最後迄道わらずに残して置くのが普通。

筆者・新潟大学教授

品質優良

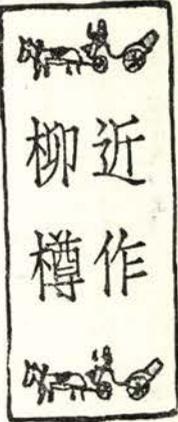
先ペンカチ

TACHIHAWA PEN



タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙

大坂市東区船場町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社



麻生路郎選
川村好郎選

雪の駅行李一つが降りただけ 鳥取県 鈴木村 諷子
 うまそうに桜うぐいを焼く話 同
 往診の気さくも腕も喜ばれ 同
 雪の道ショールもすでに春の色 同
 掌につばきしたけど腰がつつて来ず 同
 借衣裳誓詞も代読式が済み 同
のそじも読めぬカルテをのぞき込み 羽取県 谷 一征
 我儘がもうパパに似た満零歳 同
 盛付けは拙いが母の鍋の味 同
 泣き面に蜂医療費まで上り 同
 肩書は無くとも屋台の酒の味 同
 いもずるといかず汚職の検査すみ 同
 エチケット守った別れ淋しかり 大阪市 今井 童子
 泣きことは書けない故郷へ便りす。

女の智恵涙で流し切るつもり 同
 病んでいる身に振り返え今日 はなし 同
 二回目がもう常連の顔で飲み 同
 憎しみと愛激しかり椿落つ 同
 母ちゃんの膝は虫歯がすぐ治り 玉島市 井上 旭峯
 アベックに嬉しい恋の土手続く 同
 湯ざめしそうで別れた立話 同
 停年の鞆にしみる汗の艶 同
 松山を売った便りは母の文字 同
 税務署を出ると鰻屋よいにおい 同
 看護婦に微笑みかける程に癒え 羽取県 脇 通隆
 便箋の減るスピードも回復期 同
 豆腐までビニール入りの世にな い 同
 見舞客家庭の香り置いて去に 同
 らしくない先生でいて親生まれ 同
 寄せ書の友の便りがあるベッド 同
 和の乱れ第二組合までももめ 見島市 伊丹柳瓢子
 噂などふり向かず惚れており 同
 歯ブラシの余命靴へ墨をぬり 同
 暗がりへ折れたがふたりまだ無口 同
 選り抜いて値切って買わず女連れ 同



土佐のことども

土佐宿毛 渡辺伊津志

一、土佐の方言

「言うちいかんちやおらんく
 の池にや潮吹く魚が泳ぎよる」
 既に人口に膾炙しているヨサコ
 イ節から土佐の方言を御紹介致し
 ましょう。土佐弁は誇大性と古代
 性に要約されるようです。

土佐といえは質実剛健豪胆放逸
 といった点を県民の一枚看板とし
 ていますが、その昔流人が多く配
 された関係で古語が相当残って居
 り、足摺岬あたりでズック、弁を
 聞かされるは不思議でなりません。
 吉田茂元首相の出生地の宿毛
 ではテをチと発音する傾向があり
 ます。「イチキモンチキマタイキ
 シャアロ行って戻って又行け」と
 なります。又チジツズの区別の出
 来るのが国自慢の一つでもありま
 す。治郎と次郎を区別して発音す
 るのを聞くと全く驚かされます。
 このチジツズは室町時代の中頃ま
 で全国の人が区別していたのが何
 時しか区別がなくなり、奇しくも
 今日、この南海の僻地に残ったも
 ののようです。更に土佐の発音は



朝化粧夫を出してからになり 倉敷市 水谷 谷水
 初志貫徹後添いとして迎えられ 同
 離婚一号早くも出した公民館 同
 おべんちゃら返杯は無視された 同
 旧正に孫の産声馳けめぐる 宿毛市 渡辺伊津志
 呱呱の声似てるよ父母に祖父母にも 同
 上機嫌金繰りついた顔で呑み 同
 焼いもをそのまま出せる友が来る 同
 みかんむく指の白さもいとほしく 兵庫縣 常岡 孝風
 金に不自由ないみくじに苦笑い 同
 スキーより常陸妃殿下を撮りまわ 同
 美容体操してからだんだん太り出し 同
 なぐられた方を反省させてけり 松原市 守屋 万竿
 先生のせいだと少年Aの母 同
 遊学の子酒と麻雀すぐ覚え 同
 魚棲まぬ例えで袖の下とらせ 同
 床の間の一輪さしから春になり 萩市 和泉 松風
 花吹雪だけが良かったショー終り 同
 初孫を抱けば姑の顔でなし 同
 もうだまされませんと妻迫り 同
 どたんばで親が許したハネムーン 大阪市 岡本 幸子

云い訳のつもりがだんだん嘘になり 同
 サービスの音楽邪魔になる二人 同
 ドラマだと思えど泣ける名演技 同
 三度目の陳情若手ばかり行き 愛媛縣 川又 庸児
 栄転の噂へ友情崩れかけ 同
 内職の妻へかくしていた微熱 同
 栄転の椅子が汚職の記事にさせ 同
 請求書妻強引に値切る肚 宮崎市 野口卯之助
 靴ずれの豆もうれしいデートなり 同
 双六のように転動させられる 同
 言い過ぎを怒ってなかった赤電話 同
 人妻のうわさ独身寮でもめ 倉敷市 水粉 千翁
 追い越して来たなと思う借りがあ 同
 ライバルを褒めて自信に満ちた顔 同
 演出は夫迎える子を抱いて 同
 病床から頼めば我儘きいてくれ 岡山縣 永宗 宗義
 恋人の見舞ヘナースの標準語 同
 言い足らぬデートパスも満員 同
 買わないとみたかお世辞的を変え 同
 納税の書式を前に策もなく カルホルニア 齊藤 流路
 救援でなく取材に来たコプター 同

車

福壽司

心齋橋筋大丸前

電話四三三四番

レ。ですか。ハノウシ。私ハアシヤ
 ア。尻尾ハオバチ。嘘を言っても
 平気な人ハテンクロー。です。ねハ
 ネヤー(これは伊予も使いま
 す。簡単なこと。ハシヨイコト
 ヨ。これ程ハコレバア。おしさん
 ハオンチャン。大時代ハ大ハッ
 プ。こりやしよう。ハシヤンシモ
 ヲタ。騒グハウワザエル。これ程
 ハコレバア。すこハザマーニ。
 くだらうハロー。準備するハ構
 える。行ってもハ行ツタチ。着て
 ハキイテ。行くハ行クセヨ。言
 ったら、言ってもハ言うタチ。
 ついでに
 二、土佐人氣質
 土佐人氣質というハ決まって「
 イゴツソ」を挙げられますが、こ
 れは一口に言えバ頑固で自我が強
 く容易に人に屈しないといった一
 種の意志型の性格ですが、そのく
 せ外人間は淡白で底意は無いよ

明治川柳と風俗 (3)

奥津啓一朗

赤毛布

多くは近県や東北の人々で、最初は東京仕入れの赤毛布を自慢半分寒さ凌ぎも兼ねて、合羽代りに用いたのが村の評判となり忽ち多くの模倣者を出したらしく、とうとう田舎者の代名詞となつてしまつた。

赤毛布拍手を打つ二重襦

天竺坊

拍手をこくめに打つ赤毛布

三太郎

赤毛布目鏡を掛けて都入り

大葉

裏襟に紙幣を縫い込む赤毛布

虚空坊

山田では赤い毛布がいつち持て

古鹿

赤毛布ホテルと名づく馬喰町

可笑

後には茶色や鼠の毛布も現れたが、これを二つに折って細紐を通し、マント式にすっぽり被り、それで股引尻ッ端折に日和下駄、古帽子や手拭の頬冠り、太巻毛繻子の洋傘を杖にして、農閑の三四月から統々上京し、五人六人と連れ立って都大路を練り歩いたそだ。

改札を連立って出る赤毛布

風堂

赤毛布ぬがせて息子案内し

野朴斎

自転車を大仰によける赤毛布

珍毛頭

赤毛布電車道だけ見物し

春猿

細見を下見して行く赤毛布

劍花坊

乗り替えをしちくどく聞く赤毛布

吾味太夫

停留場腰落ちつかぬ赤毛布

呵々子

赤毛布浅草行と云ふへ乗り

吟の字

赤毛布脚絆草鞋で仲の町

春猿

赤毛布噺して行く麴町

閑笑子

御城下をキョロキョロ通る赤毛布

半我

四ツ角で相談をする赤毛布

三太郎

辻々で地図を掲げる赤毛布

好風

赤毛布連れをなくして騒ぎだし

芝山

赤毛布オッ魂消たを土産にし

雪のや

註、赤毛布はあかゲットと読む。

海老茶式部

前髪を出して、後髪をたらし、えび茶の袴(はかま)を穿き、黒靴下にパチンとボタンでとめる靴をはき、洋傘をさし、紫の風呂敷包を抱えていた。こんな面を、なにかの口絵でみた。これが明治の女学生の姿だ。

女学生の袴の色が海老茶化したのは、華族女学校が創りて、校長下田歌子の考案だったのが、追々他校におよび一般化したといわれている。

女学生芋屋の前をウーロウロ

当竹庵

雑誌の閲覧日曜の女学生

いしば

女学生堤を下りて花を摘み

五葉

花の中潤歩して行く女学生

同

女学生董の外は知らぬなり

指月

女学生風をいとはぬ素足にて

玉清

お転婆になり易く学成り難し

西川

女生徒の袴苦にする運動会

隣月

女学生四五人連で避暑に行き

五葉

女学生六朝風に文字を書き

虹衣

靴の紐結ばせたいが理想なり

笑倒子

女学生俗歌を弾いて叱られる

竹庵

女学生女らしいは囀られる

楽好子

の中は春風駘蕩(しゅんぷうたいう)だが、一般に早婚の風があり、学校は結婚紹介所の観を呈し、生徒も早熟で、卒業を待たずに中途退学して嫁に行く者も少なくなかった。

女学生売れそないが刀自になり
ただ愛に生きてるのよと女学生
照々子
下宿屋へしげく廻る女学生
凸助
忍ぶれど色に出にけり女学生
劍花坊
閑窓に口の四角な女学生
虹衣
十七の春を母御と呼ばれけり
始ん坊
女工より不埒の目立つ女学生
如山
退校や女に罪のあるやなし
一安
となるといささか穏やかでなくなる。

女学生を海老茶式部といった。「一老政治家の回想」(古島一雄)に「……がっかりしていたが、ふと考えたのはその頃三浦環なんていう音楽学校に行く女学生が、海老茶袴を穿いて自転車に乗って行く。女学生は皆海老茶の袴だった。そこでこれを下女の代りに使えといつて、僕が海老茶式部と名をつけてやった。そうしたところこれが非常に当たって急速に

海老茶式部とか、星とか董とかいう言葉が流行り出したのが秋劍が劍花坊として世に出たので、後には劍花坊が宗匠なり、日本の狂句界とするようになった。」とある。

海老茶式部やがて灰色式部なり

劍花坊

怒髪リボンを衝いて海老茶式部

同

と詠まれてる。略して海老茶

ともいった。

誘ふ水あらばと海老茶待て居り

如山

文金が往くと海老茶が訪ねて来

劍花坊

三人でなくも海老茶の姦しい

香葉

海老茶美が金剛杖で見得をきり

醉月坊

俄雨海老茶の箔の剥げかゝり

虹衣

後先を見廻し海老茶甘酢を買

醉月坊

ポット出の海老茶見貴の靴を穿

悟心坊

海老茶美の一度も生まれぬ面つ付

青之助

海老茶のお輿入自転車で大急ぎ

墨染式部

五つ月海老茶でかくす雨髪

長谷坊

海老茶の新婚先づ飯焚の稽古也

墨染式部

又省略して式部とも云つた。

南京の式部は尻を出ッ張らし

才喜

式部に尾して下りれば車掌が切

大陸放浪 (1)

敗亡の旅

東野 大八



昭和二十一年三月初旬のことである。

私たちは汚ない無蓋車の中にすし詰めになされて、身動きもできない状態でした。

軍隊毛布や携帯テントなどをつなぎ合わせて、青天井をさえぎっているが、厄介なのは片隅の便器である。それは二つの肥桶がナワで結いつけられているのだが、車の動揺につれ、タブン、タブンと黄色い液体が泡を噴き、あたりをびたびたにすることであった。携

帯テントでそれを防ぐようにしてはあがるが、効果はない。この濡れびしょのテントはまたご婦人方の用便の際の目隠し用のだが、もはや相手がオケだし、張り方がお粗末なので、ものの用にはたまた

い。若い奥さんや娘さんの場合は、こちらが遠慮してみないふりをするしかテはない。

またその臭気のはげしい場所に居合わす人も大変である。ある人はザブリとまともに顔へ受けた人もいる。

夜ともなると、この車の周囲には男たちがでんでにサオ竹を持って立つのだ。駐車中に暴民がはい上ってくるのを防ぐためだ。そういう連中が下にみえると、男たちはオシの如く無言のまま手にした

サオ竹をブンブンとふり回すのである。かわりに石がとんできたり、土くれがはね上ってきたり、時には糞塊が飛沫あげテントの上

しょうかね」私の前に膝さし合わせた奥さんが、またしてもきく。この人はさる重役さんの奥様でまだ若くお腹が大きい。シナシナといつもい

着物をきて、中国人の阿媽(アマ)女中を連れ歩く、金ぶちめがねのざあます夫人だがご主人は応召

中でもあり、今は粗末なセルロイドの眼鏡にかわり、国防色のモンベ、上衣姿である。膝やお腹が痛んで困るので、何かを言っていないければ落ちつけないのだ。

さっきからこのことばかりだ。私は答えない。貨車十数輛に私たち同様に詰め込まれた『日僑』何千人が華北の集結地の一つ、天津貨物廠に何日がかかりかて向かうのである。運転手はすべて中国人で、

符 始ン坊 鬼鏡坊
本町の式部小僧を供に連れ

飛行機で式部は星へ行きたがり

赤門へ来ると式部は見栄を張り

妾の父は野蠻よと式部云ひ

スケッチを仕て居る式部スケッチされ

小式部は袴の裾に段があり

誰れか立つだろうと式部目をく

遠足の式部が草と師を囲み

行水が済むと式部は厚化粧

化粧して迄も式部の沙干狩

図書館へ迄も式部の塗て行き

様々に式部未来を想像し

婦省式部共高い髪低い鼻

立ち聞きの式部思はずアライヤ

クリスマススの夜式部聖靈に感ず

グァイオレットトインキで式部レ

ター書き 素玄坊
恋娘昔八丈今式部

式部曰博愛之を仁と謂ふ
下宿屋へ友達といふ式部来る

下宿屋に恋の重荷の式部泣き

似て非なる式部又もや岩田帯

天罰観面式部又孕み

捨てられた式部畳の目も見えず

花の色移って式部後妻なり

式部出の後妻姑の鼻を曲げ

私娼の中には女学生風に花けた

似て非なる式部橋をば行戻り

華族女学校

午後三時水田町から花が降り

右二句について唾三味さんはか

つて「川柳きやり」連載の「明治

川柳の解明」の中で華族女学校に

限定する事をためらって居られた

が、「川柳」第一号誌上剣花坊氏の

「今人作句一家評」に上記久良

岐氏の「午後三時」の句を掲げ

「此句や材を華族女学校にとり云々」とあるので、こゝにならべておく。
東京女学館川俗称虎の門女学校
薙刀も少し使へる虎の門
虎ノ門政事も少し聞き囁り

別にダイヤ表や勤務割もないのう。

「日本再建はやはり全体主義的
なものでいくべきだと思ふな、民
主万歳といつたつて、旧秩序は一
夕には改まらんからな」

「日本革命だな。アカが威張る
よ、だが、それは一ときだ、が長
い一ときかもしれない」

一人は国策会社の課長、一人は
地元の新聞記者だった男だ。

「大陸から日本人が一人もいな
くなつたという事は、日本人が
大陸を忘れていいということには
ならん。何百万の英霊がここに眠
っている、ということ軍部は日
本人の精神動員をやつていた。だ
が、そのやり口、いい方は別とし
てもだ、日本民族と大陸はしっか
りな人間たちの上にひろがつてき
た。」

「横になって思い切り寝たいで
すね、大の字になって……」

「若い奴が困るんだよ、われわれ
はいいとして、二十年、三十年と
大陸と縁が切れている、そのブラ
ンクの中で育つた奴らがだ、われ
われの今の感覚、今の現実、過去、
現在、未来の大陸や、中国とのつ
ながりを果たしてどう評価し、ど
う考えていくれるかだ、その若
い奴等——」

「ああ、もうすぐ日本ですよ、
サクラの花咲くあのお城跡でおべ
んとうたべるんですね」

熱いその頭を膝にのせつめのお
ばさんが、うつろな眼のままで、
つぎつぎと故郷の話をやつてい
る。

そのまた向かうでは、セルロイ
ドの洗面器に顔をつつ込み、ほぐ
したにぎりめしに水筒の中のもの
をかけ、お茶漬式に食つて
るのが、同じとなりの背広にい

二人の話は片ときも切れない。

私はそうした会話を耳にしなが
ら、氷の様につめた左手の切株
を右の掌でなで、にぎり、さすり
つづけていた。

「戦場でオレの片手はこの大陸
の土となつた。オレは死ぬまで大
陸を恋慕いつづけるだろう、オ
レの片手のように何十、何百万人
の魂が残つたこの大陸の土は、日
本へ永久に何かを語り、問いつづ
けるだろう。それに誰かは返事を
してやらなくては——」

夜半になって水雨がきた。その
とき、地の底からうめくような歌
声が、ごろごろと相擁し、相もた
れ折り重なって眠る土塊のよう
な人間たちの上にひろがつてき
た。

雨のショボショボ降る晩に
カラスの外からひやかしばーか
り満鉄の金ボタンのバカヤロウ
鮮人娼婦の言葉のそれを哀歌に
したものであつた。幾度も幾度も
それはげだるくくり返された。そ
のうめきの上に、あるかなしかの
灯の光りを点じた汚ない毀れカン
テラがみじろぎもせず下つてい
た。

この車は、果していつ動き出す
ことであらうか。

虎ノ門電車の中で恋を知り

蝶の舞
矢飛白が飛乗りをする虎の門
瘦太楼

共立女子職業学校IIのち共立女
子専門学校
食ひはぐれない学校は二ツ橋
二合半

東京女子師範学校IIのち東京女
子高等師範学校
体操の物々しくもお茶の水
半風子

お茶の水二十五にして出るとや
同
お茶の水出で新聞の花嫁御
久米一

青山学院
青山を出で伝道の妻となり
半風子

讃美歌を水仕事に迄も青山出
同
日本女子大学
一騒ぎ騒いで目白身を固め
葉舟

目白台三千の花爰に咲き
一八
目白台嫁に行くのを嘲笑い
駄句楼

目白台男を断て舎監なり
同
目白台少しは荒い風に当て

前記の外、さすが東京で一才拾
つてみても、跡見女学校(明8)
II(一)内創立年、駿台英和女学
校(明8)、興風女学校(明12)、
弘英和高等女学校(明14)、静修
女学校(明17)、私立鳥海女学校
(明21)、東洋英和高等女学校
(明17)、東京女子学院(明17)、
(明17)、東京女子学院(明17)、

頭栄女学校(明19) 普通土学校
(明20)、大妻高等女学校(明23)、
和洋裁縫女学校(明30)、日本女
子商業学校(明36)、三輪田高等
女学校(明36)、東京高等女学校
(明36)、麴町高等女学校(明
38)、東洋女学校(明38)、日本
橋高等女学校(明38)、山脇高等
女学校(明41)、双葉高等女学
校(明42)、京橋女子商業学校
(明43)、聖心女子学院(明43)、
等で私学が目立つ、花嫁学校とい
われた所以でもあるが、教育先覚
者がいかに女子教育に尽したかは
見逃せない事実だ。

体操に襟をかける女学校
高 雄
肩揚を三四分つけて女学校
聰 鼓
表情に秋波を寄せる女学校
剣花坊
教室でニキビを潰す女学校
観面坊
女学校其秀才の鬘にて
京 雨
既に寄宿舎も完備していたとみ
えて
ラケットで落花を払ふ女学校
三太郎
寄宿部屋見の写真で鬪らる、
茶坊主
香水の壘に花挿す女学校
あやめ
先生が問題となる女学校
喜代香
摘草の二町離れて女学校
三太郎
学寮の木蔭に式部花袋集
清 磨
という句もある。

お茶の水出で新聞の花嫁御

お茶の水二十五にして出るとや

お茶の水出で新聞の花嫁御



川柳太平記 (四)

富士野鞍馬

「嘗て夜行し、十銭を水中に遺せり。乃ち炬を買い水を照らして之を撈る。炬の価い五十銭なり。ある人曰く「得は失を償わず」と、藤網曰く「五十銭は吾失うて人得たり。十銭は誰か之を得るものぞ。我の六十銭を取りて以て世に益するは、また大得ならずや」と」

滑川愚者の目からはうつつけもの (一六一八)

藤網を馬鹿と七里の浜わらは (一六二一〇)

滑川今度の糞もまた蜷 (八二二三九)

ひろわせて藤網道にかけぬ財 (一六四八)

滑川藤で繫いだ世の宝 (一六七一〇)

今ならば山師といわん滑川 (一一九一八)

言語濁らぬ読切の滑川 (一一二一五)

谷ッ七郷へ歩を当る滑川 (一一二三〇)

国の為一文おしむ滑川 (五四三二)

滑川銭ははしたな智慧でなし (一一二五三三)

滑川一門一家やとわれる (三三五六)

「日本外史」に

青砥藤網

青砥左衛門藤網は、身分は低かったが、若い時から学問を好み、僧行印に師事して学修した。北条時頼が執権となって、引付衆制度を新設し、その引付衆に藤網を抜擢して任用した。それは宝治元年(一二四七)であった。時頼の儉約質素の政策によく合い、清廉潔白の良吏として、その滑川の逸話は、後世まで大きく伝えられている。

青砥にて相模守をときあげる (四〇二四)

藤網でよい鎌倉のしめくり (一一〇九四〇)

相州を青砥で切磋琢磨する (六三二二)

なまぐらな武士に青砥はあはぬ也 (一一三三二)

「日本外史」に

滑川愚者の目からはうつつけもの (一六一八)

藤網を馬鹿と七里の浜わらは (一六二一〇)

滑川今度の糞もまた蜷 (八二二三九)

ひろわせて藤網道にかけぬ財 (一六四八)

滑川藤で繫いだ世の宝 (一六七一〇)

今ならば山師といわん滑川 (一一九一八)

言語濁らぬ読切の滑川 (一一二一五)

谷ッ七郷へ歩を当る滑川 (一一二三〇)

国の為一文おしむ滑川 (五四三二)

滑川銭ははしたな智慧でなし (一一二五三三)

滑川一門一家やとわれる (三三五六)

「日本外史」に

北条時宗

北条時宗は、時頼の子で、幼名を太郎といった。十一才ですてに弓術をよくし、文永五年(一二二六)十七才で幕府の執権となった。相模太郎と通称されている。文永十一年(一二七四)時宗二十四才の時、蒙古、元国の軍が一万余、老岐、対馬へ来襲したが、九州の諸将が戦い、元軍を撃退した。それから七年後、弘安四年(一二八一)七月、またまた元軍は、支那軍を併せて十万余、博多へ攻めよせて来た。その時大雷風雨が起り、わが軍はそれに乘じて奮戦したので、元軍の艦はみな顛覆して全滅した。これを神風と伝えられている。そして逃げ帰った者はわずか三人だったということである。

日蓮

法華宗(日蓮宗)の始祖

日蓮は俗名貫名重忠。承久四年(一二二二)安房の國小湊の土豪武士の家に生まれ、十二才の時、清澄山に登りやがて出家した。はじめ真言を学び、ついで比叡山におもむき、天台を研究したが、ふたたび安房に帰り、建長五年(一二五三)三十二才で、法華経によって一宗を開いた。

上総へは老里へ一字つつひろめ (安二宮三)

日本の蓮一宗をひらきそめ (六六三二一二三三)

日蓮もをどりのふりを付けし人へ出た。 (武六一五)

御難

この文水、弘安の二役は、わが国はじめでの外寇であったが、時宗はよくそれを克服した。弘安の役の時三十一才であった。この結果、元の侵略野望は挫折したのである。

弘安五蒙古国でも海せがき (一一五二二)

「日本外史」に

「風鈴の下に一文世をのがれ (一一五一四)

「立正安国論」を書いて、時の執

(三三三十四)と、風鈴につけられている一文銭を、藤網はどう見ると、川柳はうがっている。

神風にこりてあきない船ばかり (一一二一五)

それから三年後の弘安七年(一二八四)に、時宗は三十四才でなくなつた。明治三十七年(一九〇四)には従一位を贈られた。

次の八代執権は、時宗の子貞時が、継いだが凡庸であった。

権北条時頼に献じたが、他宗の反感を招き、翌年伊豆伊東に流された。弘長三年(一二六三)許されたが、その年、執権時頼はなくなつたのである。

なおも日蓮は、新教運動を続け、文永の蒙古襲来の危機迫るとき、またまた書を執権時宗に呈し、外宗の排撃と外寇を警告したが、捕えられて、竜の口で斬首されることになった。

文永八年(一二七一)九月十三日、日蓮は竜の口の刑場へ曳かれゆく途中、信者の、比企ヶ谷に住む兵衛左衛門の老妻棧敷尼から、胡麻の牡丹餅の供養をうけた。それが、

日蓮と婆との中に垣はなし
(武一一一三)
日蓮はかうばしさふな母にあひ
(拾三)
十二日あづききなこは間にあわ
(安八宮三)
ず
油こいほたもちを喰ふ十二日
(安七仁三)

と川柳にも詠まれ、今に日蓮信者は、九月十二日に、「御難の餅」といって、胡麻の牡丹餅をつくる風習がある。

刑場に着いた日蓮は、首の座に合掌瞑目していたが、にわかになんげしい光りが空を渡り、太刀取りの太刀は折れてしまった。

太刀取りも夢見たごち由比ヶ
浜
(一一四二)

由比ヶ浜太刀取むかしこりた所
(安七信五)

竜の口御難の太刀はなになり
(一〇六四)

そこへ執権時宗から助命の急使が届いたのである。棧敷尼が胡麻牡丹餅を供養した時間だけおくれたので、助命の使が間に合ったということにもなる。

由比ヶ浜びくりびくりとさせた所
(一一八一)

由比ヶ浜すでに一宗すたるところ
(一〇一十二)

竜の口虎口の難も法の徳
(五四三三)

御危難は鱈の口より竜の口
(四二五)

もちつとのことで日蓮片月見
(五三七)

竜の口逃れてその名高祖也
(一一一六)

この時日蓮は五十才であった。
——佐渡へ流される——

こうして死罪をまぬがれた日蓮は、十月十日、佐渡が島へ流された。その時、海上大荒れになったが、日蓮が海へ向って「南無妙法蓮華経」と書いたのが、海面に印し、風浪はしずまった。という奇瑞の伝説がある。川柳もそれに従って、

鎌倉がすむとあぶない所へ行き
(一一二四)

船の酔覚ます潮の御題目
(一一三二五)

親鸞は川越日蓮波の上
(三三二二)

名僧は波を鎮て髪を撫で
(六九一一)

祖師の徳波にも残る筆の跡
(六一二四)

筆の跡波にも残る祖師の妙
(一六〇二二)

などと詠んでいる。佐渡の謫居は三年間であった。

——身延山——

文永十一年(一二七四)許された日蓮は、甲州に身延山久遠寺を開き、法華経の道場として布教に努めた。甲州での日蓮は、

日蓮は柿と葡萄にあき給ひ
(三二四)

と、平穩に名物を詠まれ、石和川で、鵜飼助作の菩提を弔うために、石に南無妙法蓮華経を一字ずつ書いて、川へ投げこんだという話が残っている。

妙な石投てうかむは伊沢川
(五八八)

南アボン無ウボン妙ボカン伊佐和川
(百人一首)

法華経へ鮎の子をひるいさわ川
(四三四一四四一)

妙な事石に染み込む経の文字
(六九八)

日蓮記すこい咽だと勘作場
(一〇七一九)

などと川柳に詠まれている。

——入寂——

日蓮の立正安国論の予言は当た

つて、文永十一年(一二七四)と二度、弘安四年(一二八一)と二度にわたって、蒙古の大軍が来襲したのであった。そうして弘安五年(一二八二)十月十三日、武蔵池上の本門寺で、六十一才を最後として入寂した。

橋の向うで仕組む日蓮記
(八八三六)

日蓮記はお芝居にもなっている。橋は日蓮宗の紋で、それを市村座の橋にかけている。大正十三年(一九二四)に立正大師の謚号を賜わった。

新 神経疲労回復剤！

バランス



神経も
レジャーがほしい！

- はげしい頭脳労働のため、思考力に疲れをお覚えの方
 - お仕事が思うようにゆかなくて、イライラしておいでの方
 - 重要な交渉、商談などをひかえて不安なお気持の方
- ぜひ、バランスをおのみください。

山之内製薬株式会社
東京都中央区日本橋本町2ノ5
大阪・福岡・札幌・名古屋

一〇ミリグラム	二〇〇円
一カプセル	二〇〇円
二カプセル	三〇〇円
三カプセル	四〇〇円
五カプセル	八〇〇円

(ほかに医家向大入)
● お申したい説明書・試供品を
送呈

〔新発売〕





句にメスをあてる

清水白柳

一月号の「川柳雑誌」にのっている句の中から色々な意味で何かを持っている句を探り上げてみたいと思います。

産声のはっしはっしと聞えける

薫風

作者が長男を儲けられた時の喜びを詠んで居られるのでありますが、こんなにかくましく詠まれたものではない、そうざらにあるものと聞えたというのは男の子の出来た若い父親の心の中の喜びの音なのであらうと思います。作者自身もこの句はすらすらと出来た、と言って居られるように、作られた句でなくて、生まれ出た句であります。ですから真実味のある句というものは人の心をひきつける力強さを持っているということが

出来るのであります。

灸据えてなおつかわんとする生

命 旅風

大きな病院で精密検査もしてもらったし、新しい薬も飲んでみたが、どうもはっきりしない、というふうな経験のある方はたくさん居られると思います。そうした人達の中からこの句のように灸をすえて居られる人も、かなりあるのではないかと考えるのであります。

現代の医学と灸というものに、この作者は焦点をしばったのです。そしてそうまでしても使わなければならぬ人間の生命、宿命とも言えるものにこの作者の訴えようとしているものを感じさせられたのであります。

空っぽの頭だせめて高く結び

弘道

本多柳志さんがよく「近頃の句には笑いの要素が少ない、もっとあってもよいのではないか」と言

って居られるので、句評のテーマにその笑いの要素を持っている句を探したのですが案外少なかったのであります。この句はその要素をふくんでいると思つたのであります。私がよく話をする時に、皮肉にしても、穿ちにしても、その後には人間味がなければいけない、句に温か味を持たさなければならぬ。と言つて居るのですが、この句の空っぽの頭だという作者の表わしかたの中にも、單なる罵倒でなくて、「せめて」という作者の思いやりに、ほっとしたものを感したのであります。そして入れ毛をしてでも高く結うたら気がすむだろうというのか、そんな気持ちがあふれていて面白いと思ひました。

葬式に来て香水を匂わせる

孝正

この句には苦笑というふうな要素があるように思ひましたので採り上げたのです。お祝いの関しての式場や、たのしい雰囲気の中の香水はふくいくとしていて気分をよわらげるものです。そのふくいくたる香水が葬式の場となる

と何かそぐわないものを感じさせるのであります。線香やお香の匂い。生花の匂いの中の香水のかおり。そこに作者の目が、いや、鼻が、かも知れませんが、あつたの

です。

いそがずと良いのに鋸の使いよ

ろ 桂仙

私の職業が大工なので特にこの句に気をひかれたのであります。鋸は普通よく使われるのは、素人用ですと八寸(二四〇センチ)か九寸(二七〇センチ)が多いのですが、その鋸の真中へんの三分の一位だけを使って、ゴシゴシやっ

ふれるものがあるのです。それはこの句のモデルにされている女性とよく似た人が世の中に案外多いのではないかと思われるからであります。そうしたところに作者の心のひらめきを感じることが出来るのではないかと思うのであります。

優良児改札係にうたがわれ

隆子

私の句に「文句言うことと背丈が伸びただけ」というのがありますが、最近の若い人達の体格のよくなったのは御承知の通りであります。私のように背の低い男には特にそう感じられるのです。この句も小人の切符を買っているのを、切符を切り乍らジロリとながめて居る改札掛の姿を描いて諷刺しているのです。優良児という用語の生きた使い方が成功しているのだと思ひました。

プザー鳴る 心のドラマ終る時

すみれ

人生譜の中からこの句を見出したときに、これは佳い句だなと膝を打つたのであります。人と話を

するときに、時・場所・場合を適確につかんで話をしないといけないというのを何かの本で読んだことがあるのですが、句の性格の中にも、いつ・どこで・どんな、というものを含んでいなければいけないのではないかと考えているのですが、この句には、その、いつ、どこで、どんな、という具体

的なものを頭において、そして生まれて来た句であるといえるのではないでしようか。どこへ出してははずかしくない立派な作品であると思えました。

一舟

各地の柳壇の中から採り上げた句であります。この句の穿ちの深さは面白いと思つたのであります。課題吟で作句されたものでありますが、課題をはなれても、立派に生きていくすぐれた作品だといえるのであります。こうした作品が生れるのも、いつも句会でレッスンされて苦心して作句せられていうちに、出来てくるのであります。作句道場としての句会のもつ役割というものを、感じないわけにはゆかないと思うものであります。

子が出来て相談されても仕方なし

この句の子が出来ては、みこもつた時のことをさしているのでしょう。若い人の性生活に対する認識の甘さというか、それに似た感じを相談された年輩の人が困惑している状態を詠んでいるのです。そこに描き出されるであろうところの情景を、仕方なしと突き放したような省察によってよく詠み込んであると思えました。この句も各地柳壇の中から採り上げました。この外各地柳壇の中から

一カラット全財産を指にはめ
みさ子
又文句狸寝入りをしてこまそ

知亭

金泥集

麻生 苧乃 選

「雑巾」

雑巾を待たず畳が水を吸い	一栄	雑巾も添えて故郷から荷がとき	きさ子	敗戦直後雑巾までも不自由し	みさ子
インキつぼ倒れ雑巾絞り染め	同	雑巾をしぼるふりして泣いている	同	雑巾のかわり電気がやってくれ	同
雑巾とバケツがトツラに要る新居	同	雑巾がきれいに乾き春近し	同	雑巾はばあとあだなをよまよと動き	同
しほり手と拭き手に分けた大掃除	同	縫いたての雑巾しばし大事がり	同	雑巾をしぼったままで立話	周甫
雑巾も調性病みにはよく疲れ	同	デイトの日雑巾がけも歌となり	酔夢	雑巾がけ見えないとこはさつとすみ	同
民芸の味ある雑巾贈られる	阿茶	雑巾になる運命とタオル知り	同	性格があり雑巾をキユツと扱じ	有子
麻の葉に刺した雑巾祖母がおり	同	フェミニニスト雑巾持つて叱られる	同	雑巾をタオルみたいにきれいにし	同
雑巾もきつしよ朔日からおろし	同	新婦は雑巾がけも手伝う気	同	雑巾ならすりきれてますと手を見る	美代
大掃除雑巾野球のコツで受け	同	学校へ出す雑巾は母えらび	徳子	尻を上げ学校みたいに縁をふく	同
雑巾が待てずハンカチ犠牲にし	清子	雑巾の手を休めては嫁く話	同	真白い雑巾嫁の荷から出る	勝子
雑巾をリレーで渡す大掃除	同	雑巾がけのついでに子の足猫の足	同	雑巾もひからび主婦は入院し	同
雑巾で二度のつとめのタオルなり	同	雑巾をかりて上った俄か雨	春栄	さしこぬいの形見の雑巾使かれ	千夏
雑巾にも定年があり捨てられる	同	宿題の雑巾母の手をかりる	同	雑巾役五十年愚痴も言はずに母は逝き	同
		子の元氣嬉しい愚痴を聞く雑巾	同	次回題「駅弁」切四月末日	

両替えの損は覚悟で子に頼み

あつあつのベンチ夜風も素通り

す

八郎

などの句を採り上げたのであります。一カラットの句は、私はダイヤなどには縁がないので、一カラットはいくらの値打があるのかわりませんが、それを全財産だといつたところに作者の眼を感じたのであります。狸寝入りの句には作者の純粋な気持ちの現わし方、つまりケレンのない、真実味というものを感ぜさせられたのであります。両替えの句はよくあることで小さな家庭の出来事をよくキャッチしている点に心をひかれた句であります。

もう一つほしい外出用のち
宏方

同舟近詠の中で交通事故輸出と

いう前書つきの句であります。

よく詠まれていたと思えました。

外出用のちという語句に思わず

ニヤリとしたのであります。わた

したちのよく言う、いくら生命が

あつても足らん、ということが、

外出用のちという面白い語にす

べてふくまれていたのであります。

そこに作者の手腕を感じさせ

られたのであります。

コンクリートの割目で鳴いてい

る虫よ

鉄児

大きな世相の動きの中で、細々

と生きながらえている一人の人間。

それはコンクリートの割目で

鳴いている虫にたとえてい

とか。そんな人間の姿を心をこの

句からくみとることが出来るよう

を見つめたいと思うものでありま

す。

句評のむすびとしまして申し上げ

たいことは先ほども申しました

が句は作るものでなく、生まれる

す。

——本社二月句会にて

酒

清

灘・魚崎

金露酒造株式会社釀

金露

酒

灘

魚崎

金露酒造株式会社釀

酒

灘

魚崎



方圓帖

北川 春 巢 選

三脚の愛の譜となるおいとはい

大阪市 和田 痴亭

児を抱けば泉湧くごと母の愛

抱くときにイミテーションと見破られ

そろばんを弾いて首を申し出で

大阪市 今 西 章 雅

多すぎて何んか値打ちのない医博

人間が欲しいと思う人間味

久濶の鍋しめられた鶏が煮え

枚方市 宮 川 珠 笑

宗教書あさる悟りに遠い顔

接待のペースで進む三次会

継母がまだ呼び捨てにしてくれず

岡山県 永 宗 宗 義

妻の肩こんなにこつてる共稼ぎ

夜の灯へ仮面の乙女はエゴイズム

夜の街あるいて拾った自己嫌悪

岡山県 直 原 七 面 山

襟脚の清さに男気を抜かれ

情でなく愛のテクニクで縛り

肉体の汚れを隠す厚化粧

和歌山県 山 本 定 男

奈良市 村 上 春 巳

いつまでもお達者ですなと馬鹿にする

拾い屋にマンモス都市はありがたし

うどん屋のすみで二度目の恋無口

十年の年期へ釘もすなおなり

大阪のスモッグだよと襟を見せ

熊本県 有 働 芳 仙

おいでやす懐具合まず見抜き

善人が必ず勝つのはテレビだけ

焼け肥りの店へお客をとられそう

シューシャイン口笛で出るいい電話

敷かれてる顔顔顔の縄のれん

小松市 関 戸 宗 太 郎

子供部屋ボンコツ屋ほどこまきちらし

君までは失業保険に養われ

ゴルフでもしたらと部下におだてられ

むなしさは妻の実家も代替る

鳥取市 近 藤 秋 星

心眼を開けば地球回る音

土産買って来る約束で手を放し

いい話なら両方の耳で聞く

雑音の多きに補聴器をはずす

宿毛市 渡 辺 伊 津 志

お寝^ね尿^しを小さく告げて二月尽

丸い月銭湯帰りの子をあやし

水車廻って奥さん業せわし

面子だけに生きる上司の声高し

倉吉市 奥 谷 弘 朗

BGがアップ分だけ派手に着る

戦争の体験があり平和主義

下積の無口が哀れに見える日日

京都市 大 久 保 和 三 郎

今を得し陰に幾度死を想う

雌鶏が歌うわが家の人形劇



東洋の魔女も女になって生き

昇給日待ってくれない物価高

雑草が一番先に春を告げ

倉敷市 水粉 千翁

わたくしを偽る匂いルージュ引く

指白く白く病と闘わん

宝石が光って墮ちるとこに墮ち

鳥取県 鈴木村 諷子

紙屑をつくっただけの五十年

ふところの温もる話聞きに出る

きん玉を下げてすることに変わりなし

七尾市 松高 秀峰

合格に嬉しい悲鳴の私立大

年金日肩もむ孫の可愛くて

工場の人手不足へ合格し

大阪市 坂井 秀夫

タイアップ社名は易の知恵を借り

定年へヒラで通してきた机

ふる里へパスは大きく揺れて着き

松江市 柳 榮 鶴丸

幸福は金が愛情かと愚問

大自然を愛する僕に暇がなく

神戸市 吉田 隆史

信用はされぬが女難は認められ

鶯をきいた途端に句をまとめ

大阪市 福井野 迷路

智恵不足人手不足へ人の波

スモッグに飛出しナイフ交通禍

見島市 本田 恵二朗

ハイヒールでせりあげたけどまだ足らず

二次会の先頭を行く虎課長

宮崎市 野口 卯之助

お賽銭箱を神様見ておわし

老眼鏡妻の臉もたるんでる

玉島市 井上 旭峯

清いまま別れて秘密小さく持ち

道場の骨若さがこだまする

今治市 越智 一水

石がもの言うてくれると愛石家

出かせぎの夫へ唄う春の唄

石川県 大山 雅城

気の勝った女寝相は口をあけ

訊問の巡査手帖を先に出し

兵庫県 常岡 孝風

密月をカラー写真におさめられ

裸踊りで課長まで来たお人好し

仙台市 平野 光道

旅費実費課長の私用もたのまれて

かけうどんの出前エレベーターで来る

金沢市 根上 杏花

無い袖をふらす春闘準備中

珍らしいづくめ上京つかれ果て

羽咋市 三宅 ろ亭

彼も亦道を迷った一人なり

京都市 室井 八九寸

あいの手のように応えて聞き上手

名古屋市 花東 千久良

お甘えも器用になった智恵ざかり

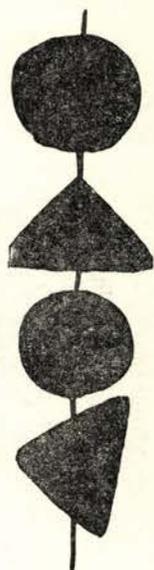
柳 箋

一冊(五〇枚綴)三〇円

送費一冊毎に二〇円

川柳雑誌社サービス部

集路一



羽田発

黒川紫香選

選者

黒川紫香
田中鳥雀
島静馬

羽田発を見送り遭難報を聞く 周甫
羽田港国際色があざやかに 半月
羽田発せまき日本を飛びたちぬ 正男
羽田発要人しきりサングラス 万竿
団体のあなたまかせの羽田発 どんたく
空港の広さへデモの波が揺れ 隆史
生活の余裕も見せて羽田発 雄々
デモ隊を煙にまいた羽田発 静水
仲の良さもう見せてたつ羽田発 不二
サングラスで何処へ行くのか羽田発 可住
ABCだけで陣笠羽田発 繁太郎
羽田発ベルトはなれた手つきなり 芳仙
公用の派手に見送る羽田発 淀月
羽田発北海道で昼にする 映輝

日本の玄関として羽田港 光郎
ホノルルへ続く空あり羽田発 和二郎
今だから笑える羽田発 滋雀
羽田発姿テレビに時の人 代仕男
羽田発そこまで散歩の慣れた振り 野迷路
羽田発みな外国へ行くみたい 宗太郎
御期待に副うとだけ言う羽田発 千翁
割当ての見送りもある羽田発 光道
都の灯こんなきれいな羽田発 愛鳩
羽田発のあとへ母親だけ残り 伊津志
羽田発歓迎されぬのもまじり 保夫
デモにまで送ってもらう羽田発 秀峰
駆け足の欧州行きも見送られろ 亭
羽田発大臣風呂敷揚げすぎ 井蛙
羽田発早くも物腰アチラ流 八九寸
日本のさくら最後に羽田発 李鳥
羽田発もうロンドンの夢を見る 藤波
会話帳何んとかならう羽田発 章雅

富士見えてバンドを締める羽田発 木魚
羽田発母くどくどと気いつけや 芳朗
金借りに行くに笑顔で羽田発 信二
それと気付いたとき羽田発つてた 雅城
羽田発汚職の顔がそり返り 洛醉
羽田発つ時ははしゃいでいたけれど 鶴丸
御名代として羽田発のメッセージ 初甫
羽田発ズラリならんだ時の顔 弘朗
羽田発出世コースの青い空 恵二朗
税金をばらばらに羽田発つ 不二
羽田発麻薬の匂い追う人ら 千久良
警察をケムリにまいて羽田発 秀夫
昼食はハワイですると羽田発 杏花
羽田発才女へ記者の筆も派手 旭峯
急用の旅でも無いに羽田発 古心
羽田発社長は日本晴の顔 宗義
羽田発つまでは太臣落ちつけず 謙士
問題を残して兎も角羽田発 十九平

五客

大臣をやめたら羽田見送らず 雄声
かけ持ちのタレントせわし羽田発 晃男
羽田発使命の重さなど忘れ 千翁
結局は私服にしとく羽田発 春巳
金策に行くとは見えぬ羽田発 雄々

人

倒産のうわさをよそに羽田立ち たけお

地

羽田発決った様に帽子振り 松風

天

羽田発英語は一夜漬のま、芳仙

軸

特命をそしらぬ顔で羽田発

オールドミス

田中鳥雀選

男性のアラ計り見えオールドミス 勝子
オールドミス太根足をばからず 秀峰
目のこじわオールドミスの気のあせり 野迷路
同窓会オールドミスが派をつくり 十九平
オールドミス食い気はかりの日がつゞき 芳仙
オールドミス愛染かつら口すまみ 洛醉
新入社オールドミスは姉御じみ 静水
太悲恋オールドミスに光るもの 滋雀
オールドミス金だけ信じている孤独 旭峯
女史の名で生きて五十の肌守る 和二郎
荷飾りをオールドミスは見にこない 章雅
老嬢でまだ居る同窓の派手な柄 光郎
クレンシルがしむついているオールドミス 春巳
代表をオールドミスが買うて出る 同
オールドミス後妻の口がかかって米 雄声
恩給がつくまで老嬢つとめる気 愛鳩
普通車の免許もとつてまだ嫁かず 不二
オールドミスしみじみ語る人が欲し 同
オールドミス捨て石になりあきらめる 李鳥
オールドミス課長も一目おいており 素身郎
出戻りの姉から順序狂わされ 秀夫
金だけがたよりオールドミス稼ぎ 醉夢
浄らかで綺麗でオールドミス 悩み 千久良
さびしい詩愛してオールドミスである 恵二朗
一姫二太郎オールドミスに夢 光道
戦争の犠牲に、にもオールドミス 弘朗
表情に出さずオールドミスあせる 晃男

オールドミスにはすまぬ話やめ 判志
 子沢山ぎせいになつて長女老い 杏花
 オールドミス或日何やらわめき立て 保夫
 オールドミスの器量をおしむ人があり 雄々
 打ちあげた話はオールドミス同志 雅城
 日のたつた生菓子オールドミスに似る 句楽坊
 金ためてオールドミスにある自信 周甫
 特急にオールドミスのコンバクト 半月
 オールドミス配置転換困らせる 木魚
 オールドミス茶会へ渋い多摩結城 淀月
 オールドミステンエージャーを可愛がり 鶴丸
 オールドミス男性なんか信じません 同
 同情がオールドミスの氣にさわり 淀月
 オールドミスハワイへ飛べるほどは蓄め 可住
 よい話幾つも捨て、母がわり 八九寸
 手放すが惜しい娘で不倖 初子
 オールドミス趣味に生きようと思ひ 万竿
 結婚を奨めオールドミスでいる 雅城
 昇給昇給オールドミスにしてしまひ 静水
 子があつてもと値引する年となり どんたく
 奥さんと呼ばれてオールドミス離れ 宗太郎
 オールドミス若い夫婦へ角がたち 同
 見逃しもあつてとうく嫁き遅れ 千翁
 倅せを神に返してまだ嫁かず 千翁
 姉さんへ詫びる氣持で日取り決め 千翁
 オールドミスいよく殺にとちこもり 代仕男

定年が一緒めめ合ふ父娘
黒田節
 傍島静馬選
 黒田節待つてましたと落口をおき 淀月
 黒田節箒を槍にして構え 雄々
 黒田節顔に似合ぬ声を出す 李鳥
 転動して先ず覚えた黒田節 映輝
 前置きが長い社長の黒田節 醉夢
 醉豚食うた口を開いて黒田節 十九平
 黒田節がお座敷小唄となりくずれ 光道
 定年の酒ほろ苦し黒田節 芳仙
 黒田節炭坑節に押され気味 不二
 黒田節この妓男装よく似合い 隆史
 モーニングではそぐわない黒田節 井蛙
 ご機嫌は黒田節くり返しくり返し 雄声
 小使が黒田節から見直され 弘朗
 年忘れママも黄色い黒田節 万竿
 しまい銭湯一人機嫌の黒田節 滋雀
 かくし芸ももう出てしもた黒田節 恵二郎
 黒田節昔は酒が安かった 和二郎
 黒田節明治の腰がしゃんと伸び 宗義
 黒田節踊る所作から過去がばれ 鶴丸
 黒田節課長に踊らす忘年会 不二
 唐紙の向うの黒田節に従き 讓二
 黒田節すめば陽気な三味になり 代仕男
 黒田節どうか宅にたどりつき 古心
 皮きりを幹事自信の黒田節 春巳

商談はあと一と押ししの黒田節 信二
 黒田節今宵胃薬のコマーシャル 同
 旅たのしこにはここの黒田節 静水
 美声はり上げてガイドの黒田節 同
 挨拶の代りに舞つた黒田節 同
 やおら立つひとつ覚えの黒田節 千翁
 合唱にまたくり返す黒田節 同
 オルガンで弾いても楽し黒田節 保夫
 黒田節幹事は酒をかき集め 同
 黒田節馬賊芸者は小股切れ 章雅
 老人も一とさし舞うた黒田節 同
 黒田節舞うて両手に花を受け 秋月
 黒田節乱れるすがすが気にかかり 同
 黒田節歌つて祖父のまだ達者 藤波
 黒田節踊れば豊夫の顔でなし 同
 じいちゃんが孫をねかせる黒田節 愛鳩
 黒田節相当捨てた隠し芸 旭峯
 ひかえ目に出たのがうまい黒田節 秀夫
 いつからかおはこになった黒田節 初甫

五客
 黒田節テンポを少し早めさせ 伊津志
 黒田節背の坊やが歌うてる 雄声
 黒田節らしいのが出る父の酒 万竿
 レコードがこんなにならんだ黒田節 古心
 声の主湯気がつんだ黒田節 恵二郎
 金屏風はらはらさせて黒田節 宗太郎
 御祝儀に覚えて来ました黒田節 春巳
 黒田節もれて路地の目出度い日 宗義

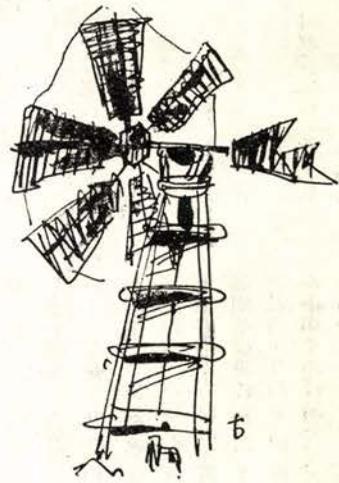
川柳お座敷小唄



本多 柳志

◇雑誌へ出した川柳も
 句会で作つた川柳も
 川柳に変わりはあるじゃなし
 没になるならみな同じ
 ×
 ◇一目見た時好きになり
 語呂のよいのはだされて
 見たり読んだりする中に
 はなれられないものとなる
 ×
 ◇好きで好きで大好きで
 死ぬ程好きな川柳でも
 没と言う字にヤ勝てやせぬ
 泣いて別れた句会場
 ×
 ◇没がしばらくつづいても
 短気起こして やけ酒を
 のんで川柳を捨てなよ
 お前一人のものじゃない
 ×
 ◇唄はさのさか都々逸か
 唄の文句じゃないけれど
 五客も天地もいらぬわ
 平抜きだけでもほしいのよ

柳界展望



句会

▼本社四月句会は七日(水)午後六時から千日前電停東入ル自安寺で開催する。春たけなわ、文字通り桜花爛漫、句も爛漫の句会へ、柳友お誘い合わせの上多数のご出席をお願いする。▼七面短詩型文学クラブ川柳部句会(和歌山市)は三月三日(水)午後五時から北ノ新地朝千鳥で開催。▼南海電鉄川柳会(大阪市)句会は三月十八日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会(大阪市)三月句会は三月十六日(金)午後六時からコクヨ株式会社階上で開催。▼大阪通信病院川柳会三月句会は二十七日(土)午後二時から南館一階別室で開催。▼川維岡山支部(岡山市)二月句会は二十日岡鉄クラブで開催。▼川維備前支部(岡山市)二月例

会は森本正州氏初老祝賀句会を兼ねて二十一日森本正州居で開催。▼川維篠山支部(兵庫県)三月句会は十三日(土)午後一時から多記福祉事務所で開催。▼川維岡山支部(岡山市)三月句会は十三日(土)午後二時から岡鉄クラブで開催。▼川維備前支部(岡山県)三月句会は二十一日(日)午後六時から浜田久米雄居で開催。▼山南川柳会(岡山県)三月例会は七日(日)午後一時三十分から近藤笹舟居で開催。▼「あしなみ」百号記念大会国鉄・姫路地区レクリエーション川柳大会(姫路市)は三月七日(日)姫路駅二階会議室で開催。▼故前田雀郎句碑が故人の氏神である宇都宮市の二荒山神社境内に建立される。竣工は昭和四十年六月末の予定。現在は昭和四十年六月末の予定。現在一口金五百円也(何口でも可)の募

金が行なわれているので応募は栃木県宇都宮市花房町一八五六鈴木宗満氏へ。▼第十六回新潟県川柳大会は昭和四十年五月二十三日(日)午前九時三十分から新津市駅前割烹「春雨」で開催。第一部、雑詠(各選者に二句ずつ、同一句を禁ず)選者、川上三太郎、白石朝太郎、第二部、雑詠(三句)、大野風柳、三浦涼秋、内藤進一路、藤井比呂夢、浜本千寿、大野風太郎により共選、席題数題当日発表、表彰、第一部特選一席に読売新聞社盾賞状、特選三句に選者揮毫品、第二部の最高点からの十句に大野風柳揮毫品、席題の成績一位より知事賞、市長賞はか二十位まで呈賞、講演「人の句が解るといふこと」岩本具里院、「工芸家の生活と意見」無形文化財小野為郎、投句は五月五日までに百円同封の上、新潟県新津市駅前柳川柳社東大会事務局宛。▼第二回土佐市民展協賛川柳大会は昭和四十年三月七日(日)正午から土佐市宇佐町西ノ丁曾我魚店で開催。▼泉淳夫句集「平日」刊行記念川柳句会は昭和四十年三月十日(日)午後一時から福岡市六本松二丁目護国神社内大濠で開催。▼中島紫痴郎翁句碑除幕式記念川柳句会は昭和四十年四月十一日(日)午前十時三十分から新潟県南魚沼郡大和町大崎、龍谷寺で開

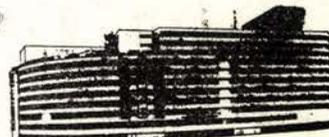
催。▼第九回長野県川柳大会は昭和四十年四月二十五日(日)午前十時から長野県更埴市おぼすて「山長楽寺」で開催。▼「たけはら」百号記念句会「竹原市」は四月四日(日)正午から駅前通り三井金属健保会館で開催。▼観光川柳創立十周年記念全国柳人誌上競吟大会(東京都)は兼題、旅・祝杯・東男・京美人・観賞・光彩・川・柳眉・十人並・周旋・年輪・各題三句、締切は六月六日、会費百円封入の上東京都港区芝新橋六丁目六六伊藤方東京観光川柳研究会宛。▼第五回京都新聞柳壇川柳大会は昭和四十年四月二十五日(日)午後一時から京都市上京区馬丸通中立売下ル平安寮で開催、兼題、友、うたう、当日席題三題発表、各題三句、投句は出席者のみ、会費百円記念品呈。

▼路郎主幹は一月三十日午後二時から大阪上本町四丁目大念寺で営まれた故高尾亮雄氏の追悼法要に出席、故人の冥福を祈られた。▼塚越迷亭氏(東京都)は二月二十七日附の路郎主幹宛寄書に、「東上の元気を蓄積されるようお願いいたします。私もそれまでに体力を蓄積に努めます。お互いに無理をしないで……。」と四月四日に開催される「川柳きやり吟社四十五周年・周魚主幹喜寿祝賀記念句会」を期待されていたのに、別項掲載のように急逝された。心中察するに涙を禁じ得ない。▼高須啞三味氏(東京都)から、「三月号発刊早くてうれしい。「川柳初篇研究」の原稿清記中、今週中には送ります。実は今、迷亭君が具合わるく、彼の新聞の原稿、編集に毎日手つだいに清記がはかまわぬ、先生のモットー「次の背」非常に教えられ

催。▼第九回長野県川柳大会は昭和四十年四月二十五日(日)午前十時から長野県更埴市おぼすて「山長楽寺」で開催。▼「たけはら」百号記念句会「竹原市」は四月四日(日)正午から駅前通り三井金属健保会館で開催。▼観光川柳創立十周年記念全国柳人誌上競吟大会(東京都)は兼題、旅・祝杯・東男・京美人・観賞・光彩・川・柳眉・十人並・周旋・年輪・各題三句、締切は六月六日、会費百円封入の上東京都港区芝新橋六丁目六六伊藤方東京観光川柳研究会宛。▼第五回京都新聞柳壇川柳大会は昭和四十年四月二十五日(日)午後一時から京都市上京区馬丸通中立売下ル平安寮で開催、兼題、友、うたう、当日席題三題発表、各題三句、投句は出席者のみ、会費百円記念品呈。

最も美しいこと
最も近代的なこと
最もご便利なこと

ハンシンは
皆様の百貨店です



大阪梅田・水曜定休
阪神
電361-1201(大代表)

不朽洞の人々



新南県立佐渡農高事務局長高野藤台エ門氏

一生をわき役ですむ運だった
(不二)

生まれつき何をするにも自分が中心にならないければ
気のすまない人がある。何をするにも自分の意見を通
し、自分の考え通りにならないと気がおさまらない人
達だ。

私は将来共派手な主役の場に立つ事はあるまいと思
うし、自分の性にも能力にも、合わない事だが、どん
な場合にも、どんな人の前でもあわてない様な自分
になりたいと思う。

わき役ですむ一生でも、わき役にしか出来ない名句
を作る事に努力したい。

ました。」と。又、氏は全国浴場新聞に「川柳古世見」を連載、古川柳の味をP・Rされた。▼八木摩太郎氏(堺市)は三月十四日堺つくし会員一行と奈良県吉野山々、広橋に観梅、一日清遊されたが、梅の咲き誇る場所は山の急坂にあるので、観光バスで、スリルは満点だが、責任上、冷汗で下坂まで大いに気を揉まれたとのこと。▼水田六龍子氏(大阪市)は三月七日、噴煙吟社春季川柳大会(熊本市)に出席、大島澄明氏らと交歓された。▼川岡霊眼子氏(諫早市)は三月六日七日は東京、九日十日は豊橋、十一日十二日は一宮といった多忙な出張旅行を続けられたが、東京では浅草の龍宝寺に釈氏亮源和尚を訪い、川柳祖翁の墓に香華をたむけ、放送

局では龍の一筆書き出演の打合わせなどをし、車から銀座の見物をするという慌しさであった由。▼福田丁路氏(高槻市)は二月二十六日から三日間、夫人同伴で熊本、阿蘇、内の牧温泉、別府と巡遊、海路帰阪されたが、熊本阿蘇へは三度目、内の牧温泉へは三十年ぶりの清遊で、今尚、静寂な温泉のたたずまいに都会生活の疲れを癒された。「三度目も阿蘇は良いと日本一」。▼国弘半休氏(下関市)はニューワールドツアー中国観光株式会社の常務取締役役に就任して以来四年、自宅へは週に二度程帰るか帰らぬような多忙な生活を送っていられるが、石の上にも三年のたとえのように、今年あたりから余裕が出来、川柳の一つも作れるようになるだ

ろうかと心頼みにしておられる。二月十日には八代市の佐野ト占氏に会い楽しい交歓を持たれた由。▼林葵丘氏(岡山市)は岡山電報局配達課長に栄進された。▼横柴光氏(愛媛県)は第五回伍健忌川柳大会に出席第六位の成績を収められた。

句集
▼句集「諷詩」(第一集)が一九六五年一月三十日に東京都世田谷区瀬田町八四石原方諷刺人同盟から発行された。句は「諷詩人」同人の自選と「諷詩人」に発表された中から編集委員が選抜したものと二本建になっていて、他に河野春三氏の自選五十句の特別参加がある。評論も現時点における諷刺理論の代表的なものとして少数が掲載されている。刊行のこと

ばに、読者が「なんだ諷刺とはこんなものか」とおもってはいけないということだ。そして、これを九牛の一毛として、次々に可能性の雲をつかむべく、次の世代……そして次々の世代へとひきつぎ発展するように支援することだ。とある。B列6号百二十四頁、額価二百円(送料共)。

住居番号変更
▼川村好郎氏(大阪府)の住居番号が左記の通り変更になった。大阪府泉北郡高石町高師浜三丁目五番六号

転居
▼菱田満秋氏(東京都)は左記住居所へ転居された。東京都大田区大森西三丁目三十二番地十五号第二泉荘内。

▼塚越迷亭(正光)氏(東京都)は昭和四十年三月十二日夜永眠された。謹悼。因みに、告別式は、三月十六日午後一時から東京都文京区根津須賀町二〇番地のご自宅で仏式に依り厳修された。

正誤
▼前号四頁下段二十一行目の句の作者、柳志とあるは梅志の誤りに付訂正。▼前号四十二頁上段十行目、及び十五行目の句主ひさ子とあるはみさ子の誤りに付訂正。

不朽洞会から
(薫)

★常任理事会——昭和四十年三月一日(月)午後七時から阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹「大萬」楼上で開催、

一、会費の件
一、その他の件
右の諸件を審議散会した。出席者は、路郎師、西尾菜、清水白柳、菊沢小松園、松江梅里、小川恒明、八木摩太郎、傍島静馬の諸氏。

★新会員紹介
四月
▼山本素郎(堺市)正
▼中村ゆきを(宝塚市)正
▼佐々木福郎(豊中市)正
以上——梅里氏推薦
(多)

大萬川 柳大会

十四周年記念
を迎えて



大会風景(舟遊漫影)

快晴にめぐまれた佳き日、三月十四日午後一時から松崎町、割烹大萬会場に於いて恒例の大会が開催された。梅里氏の熱意とそれに応えて、全国各地の川柳愛

好作家の投句によって、年と共に発展し、好けて路郎先生の選をいただいている大萬川柳の名は、広く柳界に知られて来たのである。そして茲に輝かしい第十四回の総会の開幕となったのである。互いに一年間我こそ横綱の米冠をと、互いに競い合った一騎当千の面々、定刻一時を待たず、会場へ続々と詰めかけた。其の中には遠く岡山から、宗義氏、和歌山から木魚氏の出席をみて、参加四十余名の盛会であった。

開会二時、吉田圭井堂氏の司会により、川村好郎氏の開会の辞から始まり、若本多久志氏は今日の盛会をたたえられ、梅里氏ご一家の努力も忘れてはならぬものと述べられ、松江梅里氏は謝辞と共に、四十年度も作句に精進すると、連続四年トップをかざったその闘志の旺盛さをみながらされた。

記念句会はベストテンの方々の選により席題五題、兼題五題が次々と披露された。第七位高木桃里氏、第四位傍島静馬氏が缺席のため、山川阿茶、清水白柳氏がそれぞれ代選された。清水白柳氏は大萬川柳三十九年度の毎月入選句より作句上参考になる句を句評され、大会に錦上添花を添えられた。

岩崎愛二先生は例年の如く、わざわざ京都より出席され、祝杯を挙げて下さったことは感謝の外はない。

兼席題披露に引続き、特別課題「誘惑」路郎師選は路郎先生が疲労と風邪のためご出席がえなかつたので、梅里氏によって代読された。ここに早くも四十年目のスタートは切られたのである。午後五時、散会后、引きつづきベストテン招待懇親宴が同会場にて盛大に行なわれた。

兼題「伸びる」 松江梅里選

益裁は伸びる自由を封じられ 恒明
地 人
踏まれても強く芝生の青く伸び 進之助

天 伸びるだけ伸ばし秀才いびつなり 柳安子

兼題「裏話」 菊沢小松園選

地 裏話笑い話にして出され 千翁

天 裏話誠に出来ないわけを持ち 可住

兼題「女心」 内藤ささ子選

天 逢えぬ日の女ごころは銀ねずみ 阿茶

兼題「チャンス」 清水白柳選

地 尾灯揺れて夢もチャンスも遠ざかり 柳志

兼題「夜更け」 川村好郎選

地 出し惜しむ妻にチャンス芽をつまれ 没食子

兼題「予言」 西川晃選

地 明日あるを信じ夜更けの水割る 千翁

兼題「うれし泣き」 岸本木魚選

地 うれし泣き乾けば恐い母となり 一舟

兼題「二号」 若本多久志選

地 旅がえり二号の方へ先きに着き 進之助

地 大樽の中で予言者うらうつら 梅志

兼題「四苦八苦」 本多柳志選

地 四苦八苦天の試練にまだ負けず 双楽

兼題「うれし泣き」 市郎

地 遠来の客ブランにはない祝辞 梅志

兼題「二号」 若本多久志選

地 四苦八苦の中に虚栄の自家用車 進之助

兼題「うれし泣き」 市郎

地 うれし泣き乾けば恐い母となり 一舟

兼題「二号」 若本多久志選

地 旅がえり二号の方へ先きに着き 進之助

兼題「うれし泣き」 市郎

地 うれし泣き乾けば恐い母となり 一舟

兼題「二号」 若本多久志選

地 旅がえり二号の方へ先きに着き 進之助

大萬川柳

兼題「誘惑」

入選発表

選者 麻生路郎先生
投句総数 六百三十九句
入選 五十六句

合歌 照路

誘惑に負けて汽車まで乗り過ごし

誘惑のぬれ場地でゆく指定席

誘惑のある引抜きを警戒し

現ナマに負けまいとする手の震え

誘惑をしてから焦らすても覚え

偶然の例あげ株へ誘い込み

流し目にボンボンの息きつうなり

誘惑に乗って射止めた玉の興

誘われる外車に女うかと乗り

ホームバー見に来い禁酒した僕に

誘惑に勝って冷たい布団敷く

年上の弱味誘惑したとされ

一線を引いて誘惑寄せつけず

誘惑の手口は同じ上野駅

誘惑の対角線に美少年

虎の子の退職金へ誘いの手

誘惑を待つような曲線美

誘惑へ自信がついて来た前科

誘惑はされたしこわし嫁さおくれ

半額という誘惑に妻かかり

誘惑へそらばんづくでなびく肚

誘惑のメモがまわってくるデスク

誘惑に落ちた振りしてしほりあげ
流し目の今夜来てねに惑わされ
捨てられるまでは忠告うるさがり
乗りかえる肚で社長と来たホテル
誘惑に乗る気が下を向いたまま
悪友の誘い受話機を妻がとり

誘惑のぬれ場地でゆく指定席
現ナマに負けまいとする手の震え
偶然の例あげ株へ誘い込み
ホームバー見に来い禁酒した僕に
年上の弱味誘惑したとされ
誘惑の手口は同じ上野駅
虎の子の退職金へ誘いの手
誘惑へ自信がついて来た前科
半額という誘惑に妻かかり
誘惑のメモがまわってくるデスク

誘惑に乗る気が下を向いたまま
悪友の誘い受話機を妻がとり
ワンクにボラれたことは伏せておき
褒めてはめて対手を思う壺に入れ
誘惑へのらりくらの手で逃れ
誘惑の罫ともなったプレゼント
おごらされて誘惑をした破目となり

誘惑に落ちた振りしてしほりあげ
流し目の今夜来てねに惑わされ
捨てられるまでは忠告うるさがり
乗りかえる肚で社長と来たホテル
誘惑に乗る気が下を向いたまま
悪友の誘い受話機を妻がとり
ワンクにボラれたことは伏せておき
褒めてはめて対手を思う壺に入れ
誘惑へのらりくらの手で逃れ
誘惑の罫ともなったプレゼント
おごらされて誘惑をした破目となり

誘惑と気づいたときは十重二十重
飲んででも断わる思案忘れてず
只酒の誘いにのらぬ猪口を伏せ
一べんは不浄の金と突きかえし
悪友とやっとなつた留置場
誘惑へマダムもグルと知る孤独
発起人の顔二次会を覚悟さす
再婚へ財産駆けこむように言い

昭和四十年年度 第一回
大萬川柳ベストテン(三月)

一 阿茶 四、五 大阪
二 木魚 四、〇 和歌山
三 美房 四、〇 富田林
四 桃里 三、〇 笠岡
五 梅里 二、五 大阪
六 好郎 二、〇 泉北
七 柳志 二、〇 大阪
八 雄々 二、〇 米子
九 どんたく 二、〇 神戸
一〇 没食子 二、〇 大阪

次の兼題「小切手」五句以内
五月の予告「怪病」
五月十日
五月二十日

出席者(出席順)
宗義、圭井堂、醉泉、凡子、双
菜、万里、一栄、清子、好郎、
柳志、一舟、舟遊、静歩、金三、
木魚、野迷路、阿茶、圭太、獵
人、素郎、弓彦、多久志、晃、
文秋、きさ子、美恵子、潮花、
慶之助、痴亭、章子、幸子、市
郎、梅志、満潮、小松園、恒明、
柳宏子、白柳、永断、進之助、美
鈴、琴女、弥栄子、梅里、



現代柳人録

(一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
 (四) 現住所 (五) 生年月日 (六)
 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九)
 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の
 趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二)
 川柳に手を染めた年月

(九) 君も道化の手風琴弾く泣く
 まいぞ (一〇) ピアノ・カメラ
 (一一) 有 (一二) 昭和十八年一月

(307) 浜畑 胡蝶

(一) 浜畑盛一郎 (二) 胡蝶
 (三) 大阪府大正区鶴
 町四ノ一九九 (五) 大正十二年三
 月一日 (六) 鹿児島県大島郡喜界
 町字佐手久 (七) 大阪市交通局
 (八) 岡四二一九 (九) ふるさと
 の波も騒いで迎えられ (一〇) 卓
 球 (一一) 有 (一二) 昭和十七年
 三月

道・スポーツ (一一) 有 (一二)
 昭和二十九年秋

(310) 池田 古心

(一) 池田志 (二) 古心 (三)
 (四) 岡山県苫田郡鏡野町沖
 五八三 (五) 明治三十八年五月五
 日 (六) 現住所 (七) 農業 (八)
 (九) 骨董・魚
 釣 (一一) 有 (一二) 昭和二十六
 年一月

(311) 岩田 土筆

(一) 岩田強 (二) 土筆 (三)
 (四) 福岡県大牟田市天領町
 二丁目三六ノ一 (五) 大正四年八
 月三十一日 (六) 熊本県玉名郡長
 洲町字長洲 (七) 会社員 (八)
 (九) ああ山よ妻が彼女であ
 った頃 (一〇) 江戸文学 (一一)
 有 (一二) 昭和十三年九月

(312) 泉 淳夫

(一) 泉太郎 (二) 淳夫 (三)
 (四) 福岡市大宮二丁目三街
 区四号 (五) 明治四十一年二月二
 十五日 (六) 福岡市 (七) 会社役
 員 (八) (53) 六八四三 (九) 漁夫の
 首筋綱目のことき變動 (一〇)
 常盤津 (一一) 有 (一二) 昭和十
 一年

飛・燕・往・来

★東野大八氏より (美濃加茂市)

一節 節 節

今日「明治村」の開村式へ招待
 されて行きました。

漱石・鷗外の生原稿やこの二人
 の住んでいた明治時代の日本風の
 住宅をみました。八間もあって、
 書齋が可愛い、南側の縁側は広
 く北側には書庫がある。ああこん
 な家に住みたいと思いました。そ
 して路郎先生ご夫婦こそ似合いだ
 なあと思いました。

大陸同窓会への御支援みんな感
 激しております。50人ぐらい集ま
 るそうです。

★林夢紅氏より

一節 節 節

私はこのたびカンタータを作詩
 いたしました。今年はキリンタン
 大名高山右近遊

去三五〇年にあ
 たり、カンター
 タ「高山右近」を
 書くようにと依
 頼されましたわ
 けです。

来る四月十一
 日(日曜)に、
 NHK大阪管楽
 団、合唱団と大
 阪芸芸大学合唱

団とによって大阪司教座聖堂にお
 いて初上演されます。
 もしお体の方にさしつかえござ
 いませでしたら、ご来駕いただ
 ければ幸と存じます。

なお、私は音楽会々場に使用さ
 れます大阪司教座聖堂の中にあ
 ります「聖心書房」という書籍
 店につとめておりますので、ご
 来店いただきましたらご案内さ
 せていただきたいと思います。

当日は橋高薫風さんも来ていた
 だけだと思いますので、どうぞご
 一緒にお越し下さいませ。

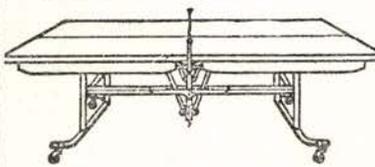
春とはいえまだ天候も不順です
 のでどうかお体を大切に下さ
 いますように。

夢乃先生によくお伝え下さ
 いませ。

新機構 Delica

デリカ卓球台

簡単にたためて
手軽にうごかせ
どこでもつかえる



福井工業株式会社

(306) 片柳 哲郎
 (一) 片柳哲郎 (二) 哲郎
 (三) 川崎市木月大
 町二〇三 (五) 大正十五年五月廿
 八日 (六) 横浜市中区御所山町一
 六 (七) 化学技術者 (八) 一

(309) 伊藤 凡々
 (一) 伊藤収 (二) 凡々 (三)
 (四) 愛媛県周桑郡小松町東
 町坂ノ下 (五) 昭和六年八月二十
 一日 (六) 現住所 (七) 会社員
 (八) 一 (九) 一 (一〇) 剣

(308) 古沢 蘇雨子
 (一) 古沢忠太 (二) 蘇雨子
 (三) 佐賀県高木町二
 一四 (五) 大正二年八月十日 (六)
 現住所に同じ (七) 会社員 (八)
 佐賀局③四一九 (九) 頭かく青
 年なれば憎まれず (一〇) 謡曲・
 将棋 (一一) 有 (一二) 昭和十五
 年四月頃

(306) 片柳 哲郎
 (一) 片柳哲郎 (二) 哲郎
 (三) 川崎市木月大
 町二〇三 (五) 大正十五年五月廿
 八日 (六) 横浜市中区御所山町一
 六 (七) 化学技術者 (八) 一



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 三月句会 (大阪市)

3月8日 午後6時

会場 — 千日前自安寺

梅一輪、一輪ずつの暖かき、やがて来
る、春の訪れに間近き三月本社句会、本
日も会場いっぱい盛況、川村好郎氏の
柳話、路郎先生と共選の「近作柳樽」
欄を選句しての感想から説き、米のもみ
の成長と川柳の上達法を引例して述べ、
後、芸道の六カシサと、其の道の修
業に打込んだ人の努力にも触れて、聞く
人に感動を与えられ、続いて、席、兼題
の披露に移り、続々と出る、佳句に耳を
傾けさせ、川柳ならではの雰囲気、醍
醐味を満喫させられた。天の天の選句は、
麻生霞乃先生が選ばれ、西尾菜氏から、
夫々発表、本月の不朽洞賞は、新鏡宮川
珠笑氏の獲得さる、こととなった。時に
午後九時過ぎ。(摩)

出席者 麻乃、摩天郎、圭井堂、静
馬、柳宏子、柳志、いさむ、素郎、庸
佑、弓彦、梅里、白溪子、一舟、吉太
郎、静歩、女、小松園、進之助、白
柳、句楽坊、有子、みさ子、季賛、亮、

八郎、恒明、滋雀、瓢太、泉睦、ゆき
を、慶之助、すむ、好郎、痴亭、水
京、たつみ、花梢、美代、すみれ、美
房、珠笑、文秋、一栄、舟遊、清人、金
三、真砂、清純、いわを、阿茶、あい
き、呂久三、宏子。

兼題「国旗」 菊沢小松園選

五輪から日の丸ちよつと見直され
日の丸を出して元日こせつつかず 宗 義
日の丸で目頭熱し明治者 句念坊
日の丸は他国で静かに見る可かり 野迷路
日の丸に外国人が先に立ち 千 夏
大國旗出て敬老の手品けり 八九寸
風呂敷となつて余生を國旗生き どんたく
日の丸もチンネンジャーへただの旗 同
一年中國旗揚げたい人も居る 章 雅
國旗振るだけで陛下に意が通じ 一 舟
血ぬられた歴史を秘めた國の旗 金 三
うれしさに國旗次第にうるんで来 一 舟
一軒家國旗をあげてよく目立ち 菜
いつ見てもいいなと思う日章旗 圭井堂
二月十一日國旗チラチラ立てたけ 好 郎
うちの学校だけ日の丸あげて紀元節 静 馬
國旗背にした公約で破られず 一 舟
町会からの國旗袋に入れたま、 好 郎
日の丸を揚げて日本のよきを知り 静 歩
二人して國旗を出した日の日本 黙 平
日の丸へ無言の抗議まだ止めず 泉 睦
日の丸が出て家だと教えられ ゆきを
國旗掲揚見物席をみなたせ 庸 佑
星条旗上手に面く子に育ち ゆきを
萬國旗矢張り嬉しい日章旗 柳宏子
日本の國旗日本で揚げてもめ 美 房

町会は國旗をあげることでもめ 菜
学校へ行く道だけに立つ國旗 白 柳
日の丸のよきは背中の子も見つけ 柳 志
あれ以来國旗は出さぬ主義になり 小松園
兼題「進学」 吉田圭井堂選

進学の入学金にどきも抜き 句念坊
進学にまづ母親が昂奮し 千 夏
進学の鞘当て凄し親と親 野迷路
定年の父へ進学云いかねる どんたく
進学へ親は所得の申告期 章 雅
親だけが進学コース決めてもめ 宗 義
進学を繰出で送る山の村 女
進学へ無理を承知の親ごころ すむ
進学へ母も一枚買うて待ち 柳 志
進学へ謝礼の方はけちつとき 好 郎
進学にわざ／＼せまき門を選り 菜
内申書程は答案書いていず 柳 志
母と子の暮しへ進学のしかり ゆきを
子は入試親は入学金に泣き 句楽坊
進学へこうもきいたか親の顔 庸 佑
球うまく投げて進学してくれず 痴 亭
進学のグループ離れて毛糸編む あいき
進学の見栄へ子供はついて来ず 一 舟
進学へ托す子の夢親の夢 柳宏子
進学を働く母へあきらめる 清 人
進学の子が二人あり春は憂し 瓢 太
進学に金の力もほのめかし 素 郎
落ちたのに進学保険の満期来る 珠 笑
よう出来る方が進学してくれず 宏 子
弟だけは進学させてやろ夜業 恒 明
ご先祖へ頼む灯りも進学期 滋 雀
金とコネ使つて三流校に入れ 素 郎
進学へ背広が欲しい成年期 いわを

個人差があり先生の気がつかれ 有 子
進学に笑い忘れた母の顔 花 梢
角帽にいとむ魅力が夜を徹し 進之助
「金の卵」と進学阻まれる 八 郎
公立と私立それから溝が出来 滋 雀
子の重荷一流校に母の見栄 花 梢
就職のせめて二部校だけは受け すすむ
進学期教師はコネを逃げまわり 美 房
受持ちの勤める学校気に入らず 静 馬
進学が決まり子供とみる桜 ゆきを
アルバイトして進学の夢捨てず 痴 亭
進学へ子は親程に苦にしてず あいき
あかんのが医学コースを撰んどう 摩天郎
進学をしてから無口な子にかわり 白溪子
ヤイヤイ云うてあげの果が二流校 柳宏子
進学だけが道ではないと子をもと みさ子
プロの札東進学ぐらつかせ 恒 明
進学へ果せぬ親の夢をかけ すみれ
不幸さえなければ進学出来た僕 いさむ
人ごとに云う進学へ親あわて たつみ
進学の希望殺した娘の笑顔 あいき
青年のファイトが進む定時制 進之助
進学へ嫂バイトさす気なり 摩天郎
進学へ教師も困る親の見栄 柳 志
進学を親にすすめる家を開き 宏 子
進学へ顔のニキビが気にかり いわを
進学へ肩を叩きに来た恩師 金 三
進学を店の主人に励まされ ゆきを
進学の度に多産を悔やまれる 圭井堂

兼題「男装」 清水白柳選

鬼は外八坂へ男になりすまし 八九寸
男装か女装かいと首ひねり 千 夏
ターキーの昔を語る母若く 柳宏子

男装をしてもすそをば合わすくせ 摩太郎
 男装をして引揚げし頃のこと どんたく
 男装を見破らるるのど仏 吉太郎
 男役ばかりで女をつい忘れ 慶之助
 男装の妻がもてる演芸会 たつみ
 男装をして離さぬコンパクト 一舟
 男装のアクセサリー文春わきほさま 好郎
 もてて女ですわといひ、そびれ 恒明
 家で男装お店はカツラの高島田 あいき
 男装が似合う職場の嵯桜 弓彦
 記者と云うタイプ男装いたにつき 宏子
 男装になつても目立つ氏育ち 小松園
 男装でならと見合いを手古すらす 圭井堂
 子供向けテレビへ男装して人気 清人
 男装が似合い一生ドラマめき たつみ
 男装の合間合間に見せる腔 照平
 別に男装でもないにまちがわれ 素郎
 男装で育てておてんば持て余し 珠笑
 男装のそもそも三韓撃つ皇后 進之助
 男装がうまく痴漢とまちがわれ 慶之助
 男装も女装に戻る婚期来る 一栄
 男装で乳をのませる菜屋うら 摩太郎
 男装の一声おとす赤電話 采
 男装のままで菜屋の花を替え 白溪子
 コンサントと男装のよく喋舌り ゆきを
 男装をして故里を口にせず 花梢
 男装のそのまま湯へはいり 舟遊
 男装の忍者が見せる腰の線 小松園
 単車をこなす男装のアイシャドー 采
 男装も女に返る湯につかり 花梢
 ミュージカルに男装のベレー帽 白柳
 兼題「気紛れ」 松江梅里選
 気紛れと知らず深入りして振られ 繁太郎

気紛れの批評に耐えて前衛派 八九可
 気紛れを三日坊主と逆らわず 章雅
 気紛れが各駅停車の旅をする どんたく
 年頃の気まぐれ親をあわてさせ 宗義
 気紛れの注文ご用聞きを慌てさせ 判志
 気紛れに春の陽を浴び背伸する 喜仙
 気紛れをする程暇をもて余し 金三
 花の頃お招きしますとそのまじまじ 静馬
 気まぐれの散歩へ海が鳴る 舟遊
 気紛れが用もないのに訪ねて来 白溪子
 ふらり出て突然東京から電話 進之助
 気まぐれに飲んでも失意の火は消えず 舟遊
 暖冬異変歳時記にない狂い咲き 進之助
 気紛れな陽気が風邪をこじらせる 金三
 気紛れの旅もマスコミはつとみ 泉睦
 気まぐれの散歩へ雨もまた風情 すゝむ
 気まぐれの旅ポストンを一つ提げ 阿茶
 ふだん着でソリ有馬の湯につかり 同
 気まぐれの恋は序曲で未完成 句菜坊
 気紛れに来た山の湯で恋ひろう 女
 気紛れの目に美しい人の花 進之助
 板切って日曜大工もういない 珠笑
 気紛れに頼んだ方は忘れて居 泉睦
 気紛れなおんなの媚を真に受ける 静馬
 気紛れの様に税務署又上げる 小松園
 気紛れの持論があつて会が採め 小松園
 気紛れのパートタイムが派手になり いさむ
 気紛れやないかと貸してくれる肚 たつみ
 ぼんぼんで有ちやめたり勤めたり 采郎
 スケジュールなく気紛れの独り旅 ゆきを
 引受けて都踊りを五十枚 八郎
 気まぐれに飲んどきと女思つてず 圭井堂
 気まぐれに飲んでいままよ昼の酒 好郎
 いわを

気紛れは独りぼっちで酔いたい夜 女
 気まぐれにのぞけば街頭トバコなり 采
 気紛れで許して呉れぬ過去に泣き 一舟
 気まぐれに立てばサクラと間違われ 采
 気紛れを秘書ではきと受け止める 珠笑
 気紛れに誘ひ断るのに困り 珠笑
 気まぐれな恋とも知らず入れ揚げる 梅里
 兼題「雲がくれ」 菊田いさむ選
 ほとほりさめて雲がくれがもどり 舟遊
 宴会のこゝらでソロソロ雲がくれ 柳宏子
 また例のどこへ社長の雲がくれ 素郎
 証人に頼んだ人が雲がくれ 圭井堂
 雲がくれ大きな穴あけてゐた 花梢
 雲がくれ夫婦気取りで熱海下車 摩太郎
 倒産へ社長はさつさと雲がくれ 柳宏子
 幹事まで耳打ちをして雲がくれ 白柳
 雲がくれあらぬ噂も立ちはじめ すゝむ
 雲がくれ刑事事故郷へ突走り 好郎
 講元が雲がくれして夢が消え 瓢太
 雲がくれしても両親折れて来ず 白溪子
 借るときは拝み倒して雲がくれ 梅里
 孕まして形がつくまで雲がくれ あいき
 雲がくれしてから人気持ち直し 珠笑
 雲がくれ故郷の駅で捕えられ 清人
 芋づるへ主犯一人が雲がくれ 同
 雲がくれ同志が横丁で鉢合せ 柳宏子
 マスコミが馳付けて来た雲がくれ いわを
 二号だけ知つてる社長の雲がくれ 好郎
 順番がくればトイレへ雲がくれ 瓢太
 事件落着きシャワー出て来る雲がくれ 水京
 妻の抵抗一日だけの雲がくれ 美代
 金策に出たのに雲がくれと云われ いさむ
 兼題「栓抜き」 本多柳志選

栓抜きへ労使へだてぬバスの旅 清人
 ふき出した泡へ栓抜きあわてさせ 一栄
 栓抜きの順を待てる阿呆らしき 小松園
 栓抜きは帯に栓抜きしてすめ 弓彦
 せん抜きのコツも覚え恋も知り 花梢
 突然の客へ栓抜き借りに行き たつみ
 歯のつよ見える若さの栓を抜き 女
 栓抜きが無うておあずけローカル線 ゆきを
 栓抜きの音でふところ確める 泉睦
 栓抜きはないかときが夜汽車なり 呂久三
 栓抜きをお盆でもつて来る女将 金三
 マスコットのように栓抜き持ち歩き たつみ
 栓抜きを隣りが貸して呉れた旅 ゆきを
 栓抜きはどこやと下座荒模様 美房
 栓抜きを幹事が持つて酌き廻り いさむ
 栓抜いて酌いても呉れずつらき 圭井堂

お気軽るに
 ご用命を

福 呉米店

高橋 操子

岸和田市野田町一七五
 TEL岸貝局②六六三一

おあいそと言えは松抜きまでしまし
 乾杯を待つ松抜きをせわしなさ
 松抜きを帯に挟んでご返盃
 松抜きを七つ道具の中に入れ
 松抜きを持ってチップも呉れず去に
 松抜きも添えて売りの念の入り
 松抜きがシビレ切らせている祝辞
 キャンプ昼又松抜きが見付からず
 松抜きも遺品となって山を下り
 松一つぬいても過去はかくされず
 柳志

席題「ノック」 傍島静馬選

使用中わからんのかと怒鳴られた
 社長室タイ締め直してからノック
 待ってるノック今度は八百屋かい
 知って居り乍ら彼女はノックする
 ノックせず入ったがバツの悪いこと
 ノックにも暗号がありそと開け
 ノックせず入って娘に叱られる
 いつからかバツのノックを子が覚え
 お隣りのノックへバツを顔を出し
 ノックして見ているならいものを見て
 待っていた様にノックへ立ちあがり
 ノックして返事も無いのに開け急ぎ
 深夜のノック弱くつづいてる
 ふたりともノックが聞えなかつたらし
 バトンはノックもなしに入つて来
 酔っている父のノックが大きく過ぎ
 午前様の仇名の通りまたノック
 借りに来た弱身ノックも小さなり
 ノックする前にあの人だと判り
 愛してる心がノック聞き分ける
 ノックする風呂を今出たばかりなり
 おれだよとノック小さく勝手口

素郎 梅里 静歩 珠笑 進之助 素郎 好郎 柳志 柳志 柳志 珠笑 滋雀 恒明 呂久三 瓢太 圭井堂 一栄 花梢 梅里 たつみ 金三 美代 素郎 恒明 珠笑 圭井堂 一舟 小松園 あいき 呂久三 弓彦

待つてゐたくせにノックへすねてみる
 番号を忘れノックをして廻り
 公用と私用ノックで聞きわけける
 静馬

川維 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

使うだけつこうで金づる忘れられ
 間にあわん奴がまっ先座り込み
 金づるの方が計算づくで居り
 成り行きは考えていぬ座り込み
 金蔵がつかずバテント持ちくされ
 ハンストへまさかと思ふ娘が座り
 神経痛もとはといえ座り込み
 曲り角から泣かされた声になり
 このへんで若さへ譲る曲り角
 下積みで終る無学を子にさとし
 上司には媚びず下積もなし
 下積みは明日を信じる夢に満ち
 表彰をされる下積み下を向き
 金づるの男にくらしい器量
 控え目にしてても名指しをされる喉
 新首相まず財界へ頭下げ
 好きな人あるのか金づるのさらいぬき
 倒産へ金づるの本音出してくる
 控え目の夫へハッパかける妻
 しゃくし定規に税吏とりたてる
 兵法の孫子も知らぬ座り込み
 標識の重なり合うた曲り角
 金づるをにがさず追わすバツ
 座り込みの毛布冷たく積み重ね
 控え目に飲んだは三本までのこと
 曲り角ふとことつけを思い出し
 金づるが切れたかバツの名が変り

あいき いさむ 静馬 一舟 柳宏子 金三 章雅 柳志 痴亭 清人 文秋 あいき 小松園 恒明 梅志 好郎 梅里 瓢太 一栄 凡子 白柳 東天紅 双葉 幸雄 万里 静歩 綺史朗 庸佑 滋雀

曲り角尾行の足が早くなり
 小役人拘り定規と思つてず
 その先は云わずまかせた曲り角
 控え目にそつと出したるポチ袋

宗義 八郎 野迷路 喜仙

川維 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

でこに汗かいても負けた腕角力
 中継のひいき力士が負けかかり
 発育のよさへゴム輪の跡がつき
 餅は餅屋湯気で加減が判るらし
 老妻も湧湯の湯気に湯のしされ
 目に見えぬ糸からスイ抜け出さず
 かけ糸のまわも跳ねる子を叱り
 三の糸心と別な灯へ唄い
 嬉しさに見せびらかした免許証
 お歳暮の酒で済ませた三カ日
 神様に貰うた命とわかりかけ
 貰うだけ貰えば孫の里心
 格子戸へ「猫あげます」とも余し
 派手好み母の苦しい気も知らず
 手内職隅で自責の胸苦し
 苦しみの中でまごとの友が出来
 苦しみに勝てず払えぬ金を借り
 苦しみの無人へ想う母のこと
 生活苦春呼ぶ力ありつたけ

清子 白柳 柳宏子 井平 一栄 章雅 邦彦 六龍子 正彦 一栄 静馬 一舟 あいき 風仙洞 半月 三時 美禰子 文秋 金三 呂人

川維 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

アパートで気兼ねらずの新世帯
 アパートで簡易生活共稼ぎ
 アパートは只寝るだけの菓の如し
 アパートの隣り同志であぢけなき

泉 水 エス子 平八郎 紅茶

金持ってアパート住みの老夫婦
 アパートで三坪の庭が欲しくなり
 アパートへ隣れ秋刀魚を焼けず
 なまけ者だがアパートの住心地
 アパートに住んで下界をへいけし
 アパートの窓窓窓にある生活
 アパートの話題を選ぶ新世帯
 アパートの隅にパンセッタ暮を告げ
 アパートが気楽でいゝと老夫婦
 アパートでお琴は立てたのまんま
 アパートに住んで神経すりへらし
 アパートの主婦は互角見栄を張り
 産制もアパート住居の枠に置き

人生 快夢起 曉舟 峯圓 カロ女 浅太 河童風流 同 紅溪 緑風 押山 あき坊 万里歩

川維 京都支部句会 (京都市)

田中烏雀報

だまって慕うタイプを叩く
 三吉野の花分けて入りにし人よ
 慕うてる人へ他人の掌がふれる
 慕うている心の秘密見透かされ
 楠の日影栄枯へ蟻のはい親生

磯 全子 亀一 句楽坊 親生

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区源蔵町5 (361) 9373代
 支局 東京都千代田区神田鍛冶町2 (252) 4941代
 名古屋市昭和区村田町2 (88) 9069

米枯一夢記憶瞬間を馳け抜ける 正男
石垣だけとなりし屋敷の冬の風に立つ 極堂
インプミ一つありて夢と彫つてある ゆきら

坂は少女を大たんにして光る 豊次
こゝで曲つてゐるので坂道を振り返る 白石
坂登りつめれば近江の風がある 烏雀
劇薬のまだ棚にあり春の雷 司郎

川雑 大聖寺支部句会 (加賀市)

野村味平報

ままにならぬ人生だからおもしろい 雅城
人生はこんなものかとさとり切り 味平
人生の花盛りなる眉匂う 政代
人生の最後の虚栄葬列が続く 酔羊
酒煙草のまず人生無味に生き 光郎
人生の破局カス場で出来た友 久雄
七転び八転び人生観変えず 一路
おたふくする流し目は軽く受け 酔羊
流し目に女の炎燃えていて 一路
歳がいもなく流し目のまぶしすぎ 味平
叱られた子が流し目で母を見る 政代
きつとよネながし目をして女去り 雅城
こちこちの理性流し目歯が立たず 光郎
流し目へ日帰りの旅くやしがり 久雄

川雑 岡山支部句会 (岡山市)

浜田久米雄報

絵はがきに新婚さんが甘えとり 基弘
はがきにも原稿が要る筆不精 照路
転々とはがき付箋で舞い戻り 謙士
督促の葉書冷たい字と感じ 哲郎
ハシカの子校内郵便見舞に米 あきら
出したはずの葉書ポットのの中にあり 博友

義理で出す葉書はおべんちやらを書き 浄美
一杯に書いて用件の無い葉書 蛟虎狼
拝啓も敬具もぬいた子のはがき 三平
絵葉書の消印遭難三日前 始ん坊
絵はがきに烏城焼けずに残つたり 天龍
はがきでは用が足りない仲となり 宗義
字のうまいハガキが借金申し込み 笹舟
立飲みのハガキをそつと数えてみ 柳五郎
得手勝手ばかりはがきの投書がき 佐加恵
黒棒の葉書落葉のように来る 胡風
要点のはがき三行だけで済み 久米雄

川雑 備前支部句会 (岡山市)

横山一声報

門松のない新年に馴れて無事 久米雄
先代の残した松に養なわれ 正洲
お隣りの自慢の松で粗干かず 大陸
老松の昔語りか風に鳴る 柳風子
松のある家ですと道教えられ あきら
松の内ちびりちびりがくせになり 良江
松根油取った話で山を降り 宗義
じむそうなるまいとする松の内 芳月
お手植の松すくすくと国平和 一声
とこしえに幸あり松の背の濃さ 浄美
松すぎて一年の計ねりなおし 鼓山
松の内少々派手な着物にし 照路
おみくじでしばられてる宮の松 胡風
鉢植えの松へ米寿の苦がつき 謙士
門松を愛して紙にえがかれる 幸仙
初けいこ松すくしから舞いはじめ 静女
手を握る機会あたえず夫婦松 知水
ひよく塚そのかたわらの夫婦松 伊久野
違い棚書いて芝居の幕が出来 美枝子

違い棚眺めて大工の腕をはめ 君子
違い棚余生豊かな語いの本夢中

川雑 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

再会へ互いに老けたこと言わず 昭夫
再会の喜の中にこわい人 鶴丸
見違える二人になって再会し 代仕男
見得を捨て意地まで捨てて再会し 節枝
再会を約す手と手へ発車ベル 正夫
お互の顔再会へ小じわふえ 青香
靖国で再会誓った日の記憶 詩朗
雪国の芸術饒うカーニバル 富枝
降る雪へ鈍子の数のふえる夜 近子
雪国の愚痴も言わずに家業つぎ 礎山
いつわって酒酌む日なり猛吹雪 明甫
雪を見てホームシツクの筆をとり 孤呂二
ネクタイの地味も若さはよく似合い 明朗
税務署のつけてるネクタイいやな柄 一机
ネクタイのゆがみ気にする指定席 雄々
ネクタイを最初のプレゼントにきめる 幸子
お見合の日のネクタイをきつく締め とみえ
白痴とは知らぬ美人に逢うた夜 佳鳴
美人とは他人が決めるコンテスト 三鈴
商魂は美人も揃え客を寄せ 達朗
男性のみる美人とは顔で決め 好江
美しい故に病弱暗い日々 大鳥
浮世絵はみんな美人に書いてあり 定人
飛入りが大口引いたあみだくじ 新雪
飛入りが賞品みんなさげて去に 奎
飛入りが酒の機嫌で寝てしまふ 無閑
再会の言葉は胸にひっかかり 蛙眠子

「川傍柳初篇研究」の

バックナンバーご希望の方へ
本誌昭和三十八年四月号から連載さ
れている「川傍柳初篇研究」のバックナ
ンバーの二十一回分(昭和三十九年十
二月号まで)を一トまとめてお読
み願えることになりました(残部少数
ですから売切れたらおゆるし下さい)
至急ご注文願います。

誌代二五二〇円 (書籍小送料負担)

川柳雑誌社サービス部

川雑 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

金廻りマダム抜け目のない素振り 輝水
税務署はすぐに感づく金廻り 芳子
買物の籠が知ってる金廻り 正夫
金廻り顔の血色左右する 孝華
金廻りその内なんとかなるだろう 清夢
新入社人事部長の背にかくれ 尚州
新入社もう決っている派閥 昌
新入社新調づくめ靴がなる 明朗
新入社又生き方を若くする 清風子
二年目が世話をやいてる新入社 醉陶子

川雑 宇部支部句会 (宇部市)

安平次弘道報

釣天狗逃げたのはかり自慢にし かつ子
夜逃げとも知らず車窓へ子なしやど 六花

逃げるよな日と呼び戻したい受験生
 ギル前どうしようもなく追い抜かれ
 追上げるムチへ馬券を握りしめ
 七転八起タルマに駄目はない
 駄目ですと女房横目で買わせない
 客の居る追加に駄目を云いかわる
 「進学は駄目だ」へ母の顔さみし
 返落日二三次駄目を押しして貸し
 イヤだとは云わざ辞令にある威圧
 穢れなき瞳さっぱりイヤと云い
 防火デーLPガスの場所も変え 鶏 足

川柳 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

兄弟と言われ博徒の義理を立て
 年の差が兄に遠慮な口を聞き
 弟の素行が兄の身にひびき
 柱傷その想い出も兄おとと
 大ニエスこの一年を回顧する
 悲喜交々十大ニエスにみる世相
 傷心の壁と対座をして無言
 悪友の噂を訊けば禁酒ほけ
 せめてもの謝罪に妻と春の旅
 抱いていた夢を易者にこわされる
 片想い四十おくでの夢さめず

川柳 大鉄支部句会 (大阪市)

辻白溪子報

単細胞の生命へ合わず顕微鏡
 本読まぬ老婆に真理教えられ
 電話から帰った顔にあるあせり
 嬌声が聞える電話で帰宅つけ
 みろく菩薩の微笑へ春の陽もろく
 微笑無心乳房ふくんだ口元に
 顔色も変えず焦点はやかさされ
 うたた寝へ目かくしされた週刊紙

夕映えを突き刺すまに塔が建ち
 風当りが何だ俺には俺の意地
 ストープの不始末大島灰にする
 公用の電話時候の事も触れ

川柳 川口理休報

菜っ葉服が幅をきかせるおらが町
 身につかぬ洋服着て社長立ち
 ナン服似合って藍綬の年令になり
 菜ッバ服着ておかつぱもおすと
 麻雀で青くなる人もいる三カ日
 スネてみることも知らず女老い
 すれた子へだまって玩具買ひ出る
 母だけがスネタ娘の肩を持ち
 すねるだけすねて寝た子の目に涙
 菜葉服脱後とともに速くなり
 生活を支えています 菜葉服
 スネているうしろ姿が崩れて居

川柳 南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

猫なので声で築いたあのレン
 役得の公私混合法まず覚え
 停年へばったり止んだもらい
 役得に新聞紙で包むもの
 働き手時計のような勤め振り
 働き手徹夜したよな顔もせず
 全快を待っておれない働き手
 七五三にもひけをとらない働き手

川柳 富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

晴着まで姉のお古でそだつ四女
 割り込める座席へ晴着かけもせや
 ストープで河内みかんのまじごと

表彰状坊やきよんとんとして貰い
 大事件挙げた表彰五百円
 表彰のされた男の転落史
 夢みん消えて三児の母となり
 十円あげて大きなぞみ頼ん
 のぞみなき生活へせめて娘の笑顔
 参道でおばばゆうく用を足し
 参道は祝儀袋のカスが散り
 参道をかばい合いく老夫婦
 参道でうちの忍者はそをかく
 こ、からは参道小用足しておく
 参道に厄よけ祈禱のびらを張り
 参道で親しい顔もかしこまり
 参道で親しい顔もかしこまり
 参道で親しい顔もかしこまり

川柳 丸紅川柳会 (大阪市)

村田瓢太報

胸高に結んで帯のういういし
 胸を病む人とも見えぬ食べっ
 受取ってならぬお金を胸に聞く
 胸中は秘して男の高笑い
 胸中の口惜しさに酒を浴び
 胸張って歩こう停年程近く
 胸も背も出すだけ出してニエ
 胸のうち見せずから断られ
 霧の夜抱かれた胸のたのもしく

川柳 あすなる川柳会 (大阪市)

山本素郎報

三代目庭へゴルフのネット張り
 おしゃべりの婦りはいっ庭つたい

庭見てちやもちりまんを建て
 庭を普め松を普めても酒は出す
 由緒ある庭か知らんが拝観料
 吹き出したわけを娘は謎めかし
 日本中飲んで歩いたように云う
 日本に生れてよかつた温泉に浸り
 日本の底辺えぐるカメラルボ
 パンザイをすくにしにる日本人
 忍ばせている足音をやり過し
 足音でうまうまいったと妻の勘

川柳 城北明老会 (大阪市)

田中風柳報

御見合に相手の顔を見ぬ内気
 内気老婆老人会では良くし
 内気なる女体の線で媚び
 云ふ事も為す事もしてワテ内気
 内気だと思えど酔えば阿波
 宴会のすみで内気は席をとり
 内気の娘の字ばかりで意志表示
 内気な子おねだり丈はワイト出
 内気だと思ふ娘のデート見る
 姉内気妹のおてん婆良く目立ち
 縁談に内気の娘見なおされ
 内気でも強く生きぬく未亡人

宴会・出張パーティ・折詰弁当
 梅里ノ店
大 萬
 料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇
 TEL(三三)三九三五番
 TEL(三三)七七二番
 鮎の店 アベノ橋近鉄地下食通街
 TEL(六三)〇一四七番
 申の店 南区豊屋町三ツ寺センター
 TEL(三三)九一八四番

柳樽室

路郎生



★花だよりと埃と交通事故の春になったが、怖ろしく寒さに弱い私にはまだ真冬の連続で室内に閉ぢこもっている。板戸にガラス戸、それにカーテン、一ト間おいてガラス戸にカーテンの中のベッドの上に横たわっているののである。旅へ出るにしても六月から九月までに、李ラインのように線を引いてその間に旅することになっている。行き先によっては五月から十月ぐらゐまで延長してもよいらしい。★ところが四月に東上しなければならぬことが出来たので、そのつもりで、編集のこと、ホテルのこと、附添いのこと、その他何かと早くから準備にかかったが、とうとう疲れと、カゼで寝込んでしまった。三月二十

日になって、四月の東上もダメだという見通しがついたので断念す



ハンディな生ビール
**アサヒ
スタイナー**
1本 65円

ることにした。今の私はムリをしないこと、他に迷惑をかけないこと、それが一番いいことだと思っている。★川柳のアマチュアに徹していた迷亭君が亡くなった。今は全国

浴場新聞の社長だが、古から川柳をやっていたので有名だった。「きやり」「時評」を書いてきた。しばらく大阪に就職してしばらくもあった。拙宅へ見えたのはついこの間のように思っているが

奥津啓一朗氏の「明治川柳と風俗」等々、古典派や懐古派の花盛りだ。本誌はこれに対抗する新人の飛躍をのぞんでいいるが、近來古典派に圧倒された形だ。明日の川柳を担う人たちの作品やエッセイなど、ドシドシ寄せて欲しい。新人の独善や萎縮は本誌のとなれないところだ。大いにハッスルされた

★川雑支部句会—四月
★玉造句会—10日
(土)六時半、題、小島・思案・出しゃばり、所、市電玉造南百
米大阪信用金庫、★阿倍野句会—20日(火)
六時、題、不安・予備校・テスト・職場、

所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割京大萬、★京都句会—16日(金)夕、題、衛星・寮人・含む、所、上京区相国寺北門前上ノ町田中鳥雀居、★南海電鉄句会—15日(木)六時、題、交通マヒ・針・やせがまん、所、難波高架下親和クラブ、★明和研究句会—11日(日)一時、題、足・歌・箱、所、阪神鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館、★どんぐり〇B川柳会—25日(日)一時・第三回句会★富柳会吟行句会11日(日)十時・河内長野駅集合天野山・金剛寺・題ユースホステス・中味・誘かい・カゲロ

〈日本のあゆみ〉
明治・大正・昭和

近代100年博

3月20日 → 5月31日
主催 大阪読売新聞社
入場料...120円・60円
懐しい明治100年の歩みを
最高の資料で構成しました
協賛会場...池田逸翁美術館

宝塚ファミリーランド

募 集

課題吟募集

- ふみ台 (十句以内) 松江梅里選
- 全盛 (十句以内) 那谷光郎選
- 線香 (十句以内) 内藤きさ子選
- 借著 (十句以内) 戸田古方選
- あせる (十句以内) 長野井蛙選
- 砂 (十句以内) 菊田いさむ選

毎号募集

- 近作柳樽 (雑詠七句以内) 麻生路郎選
- 方帖 (雑詠十句以内) 川村好郎選
- 川柳塔 (雑詠十句以内) 北川春巢選
- 文 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選

投稿規定

- ▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅字を明記する。
- ▼ 「近作柳樽」は一般作家の雑詠を募る。
- ▼ 「課題吟」「方帖」は誰でも投句が出来る。
- ▼ 「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

川柳雑誌 第四十号

定価 二二〇円 (送料六円)

半力年 七五六円(半) 巻
一力年一、四四〇円(半) 共

昭和四十年三月廿五日印刷
昭和四十年四月一日発行

Printed in Japan

発行所 **川柳雑誌社**
大阪市住吉区西内町四丁目二番五号
電話大阪(67)七〇八二
振替口座大阪七五〇五〇番

編集兼発行人 麻生幸二郎



国立公園 奥新和歌浦・雑賀崎

風光明媚な海岸美を誇る
国際観光旅館

うかまたろ
魚又楼

TEL 和歌山 ④ 0431・0387



高単位処方
ベストン強化



50錠・100錠・250錠

健康は《元気な細胞》から
アスピリン

このマークの
薬局・薬店で
お求め下さい

おいしい内服液

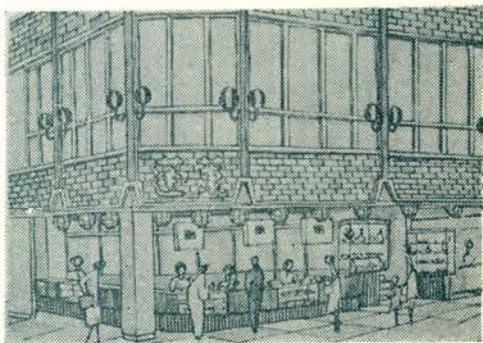
アスピリン



アスピリン

- 疲労回復 ● 心臓 ● 肝臓 ●
- 妊娠中毒 ● 二日酔 ● 神経痛 ●
- 腰痛 ● 食欲不振 ● 便秘 ●
- 疲れ目 ● 病中・病後の回復 ●
- 手足の脱力感 ● 湿疹 ●

豚饅・焼売



広東料理

蓬萊

大阪 なんば

TEL (641) 0551 ~ 2

高島屋店・そごう店・天満京阪ストアード

麻生路郎著

好評噴々

竹川柳饅賞

川柳の味わい方・五百数十句

ものである。

(毎日新聞評)
麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十余年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとした

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがって、一気に読ませる魅力がある。

価二五〇円
送料八〇円
B6版
二五〇余頁

発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地

電話大阪(671)六〇八一

振替口座大阪七五〇五〇

楽しい遊園地に南国ムードいっぱい!

あやめ池 南太平洋博



いま開催中→6月13日まで

ヤシの葉しげる常夏の国……
すばらしい夢とロマンの島々
世界の楽園・南太平洋の風物
や生活をたのしく紹介します

日本歌劇団春のおどり・水上
ジェットコースター・スポー
ツランドの最新遊戯具も人気
のマトです

日曜祝日には野外劇場で豪華
アトラクション開催 池上では
空中スリラショー毎日公開

春のレクリエーションにご
家族おそろいで あやめ池遊
園地へおでかけください

あやめ池駅前が遊園地 入場料…南太平洋博も
歌劇も全部見られて 150円 こども80円
近鉄線からご遊覧の方は割引入場券つき乗車券
発売 お求めは近鉄各駅と近畿日本ツーリスト

近鉄 あやめ池遊園地

サ
ン
ト
ー
ビ
ー
ル



青年のビール

ブリュッセル国際食品コンテスト
1964年度ビール部門金賞受賞

一番よい酒

うまい酒



菊正宗

清酒

宮内庁御用達
株式会社 本嘉納商店
神戸・灘・御影